

教育研究業績書

平成 年 月 日

氏名 西村 美東士 印

研究分野	研究内容のキーワード	
教育学、子ども学	教育学、生涯学習、子育て支援学、子育てまちづくり、子育ての個人化と社会化	
教育上の能力に関する事項		
事 項	年月日	概 要
I 教育方法の実践例		
1. BBS（電子掲示板）システムの開発と運用の取り組み	平成 20 年 4 月 （～平成 30 年 3 月）	授業を受けたあとで、自分の気づきを書き込ませる「電子掲示板システム」（CGI による）を開発して、ホームページで、受講学生に公開した。携帯電話やスマホからも書き込みができる。講義中に他学生の記述をリアルタイムに一覧形式で見ることができることは、とくに大人数授業場合は交流ツールとして有効である。
2. 授業に ICT を活用した学生支援の取り組み	平成 26 年 6 月 （～平成 30 年 3 月）	現行専門科目の内容と進行に沿って、提示したパワーポイントの内容を、リアルタイムにアップロードした。このことによって、学生の予習・復習を促した。このほか、携帯・パソコンによるカード集約システム、学生同士の討論と解決の場、ワーク・ゲーム集、ツール・ファイル集、生涯教育学資料集などを提供した。これらに対する学生の評価は高く現れている。
3. ホームページの公開による授業内容のフォローアップ	平成 27 年 9 月 （～平成 30 年 3 月）	「研究課題：社会教育の理念・内容・方法」として、青年教育、子育てのまちづくり、生涯学習のまちづくり、キャリア教育、ICT 活用の 5 本柱から構成するホームページを学生に公開し、研究内容と方法を示した。また、授業に必要なかつ役立つ関連資料もダウンロードできるようにアップした。

Ⅱ 作成した教科書、教材		
1. 生涯学習か・く・ろ・ん (学文社、四六版、237p)	平成 3 年 4 月 25 日	個人の充実を支援する講義技術、講義型学習の問題点、社会教育・高等教育の能動的学習の方法、若者にとっての情報機器と、若者への情報提供のあり方、青少年の団体活動、地方自治体における学習プログラム作成の視点などについて論じた。これを教職課程や社会教育主事課程の授業で教科書として活用した。
2. こ・こ・ろ生涯学習 (学文社、四六版、237p)	平成 5 年 3 月 31 日	学生の「心への関心」の強まりに応じて、生涯学習の視点から、心の交流の意義と方法について論じた。学校週 5 日制、態度変容の学習、学習相談などについても論じた。これを教職課程や社会教育主事課程の授業で教科書として活用した。
3. 癒しの生涯学習 (学文社、四六版、156p)	平成 9 年 4 月 10 日	青年期の葛藤、自立への煩悶の中で学生が見出そうとしている個の確立への展望を、明らかにしようとした。また、学校教育や社会教育におけるカウンセリングの活用例を示し、学生自身が「人間はなぜ生きるのか」、「どう生きればよいのか」について探るよう促した。
4. キャリア教育のための暗黙知教材の開発 (手引き書) ー通信教育課程におけるキャリア教育の質の向上をめざしてー (聖徳大学、A 4 版、80p)	平成 27 年 3 月 31 日	平成 26 年度選定放送大学教育振興会助成研究(研究代表者)『キャリア教育のための暗黙知教材の開発』80p として発刊した。
5. 子育てとケアの原理(共著) (北樹出版、A 4 版、ページ数未定)	平成 30 年 4 月 25 日	担当箇所は、「生涯学習と市民参加」で、生涯学習社会と教育、市民参加＝公共性と教育、ICT 教育(情報コミュニケーション技術)、一斉授業とアクティブ・ラーニングなどの内容である。教育関連科目において、広く利用できることと、教育原理に関する斬新な視点を提供できるよう意図している。
Ⅲ 教育上の能力に関する大学等の評価 該当なし		
Ⅳ 実務の経験を有する者についての特記事項		

外部委員等（開始時期順） 1. 研究員 2. 専門委員・審議会委員 3. 生涯学習推進協議会等委員 4. 社会教育委員	昭和60年4月1日～	1. 研究員 ○社会教育協会、ベネッセ教育研究所、生涯学習開発財団、全国生涯学習まちづくり協会等民間研究員5件 ○国立教育会館等公的機関研究員6件。 2. 専門委員・審議会委員 ○（財）AVCC視聴覚コンサルタントセンター、中央青少年団体連絡協議会、国際青少年育成財団理事、全日本社会教育連合会月刊誌「社会教育」編集委員等民間機関委員4件、 ○文部省衛生通信利用推進委員会、メディア教育開発センター、文部省全国の生涯学習情報のシステム化に関する調査研究調査研究協力者、神奈川県青少年総合研修センター、東京都青少年センターヤング情報プラザ、総務庁青少年対策本部青少年情報研究会、東京都青少年センター運営委員会会長、いわき市21世紀プラザ等整備基本計画検討委員会委員、神奈川県保健医療人材育成検討委員会委員、横浜市港区南区役所まちづくり塾運営委員会、神奈川県生涯学習ボランティアバンク部会長、八潮市ボランティア推進審議会委員等公的機関委員26件 3. 生涯学習推進協議会等委員 ○佐野市、桶川市、東金市、柏市、東京都、練馬区、葛飾区、中野区、港区、葛飾区、豊島区、台東区、練馬区、大和市、神奈川県、南淡町等自治体21件 4. 社会教育委員 ○葛飾区、新宿区、厚木市、徳島市社会教育委員4件 合計 66件
V その他 1. 東京都青年の家及び社会教育主事室勤務での実務	昭和 52 年 4 月 1 日～昭和 61 年 3 月 31 日	○東京都社会教育主事として、青年教育プログラムを開発した。府中青年の家では、わが国の社会教育施設としては初めて、デイスコに通う若者を受け入れた主催事業を開発した。 ○武蔵野青年の家勤務では、「情報講座」を開き、図書館や民間のサラリーマンの研究会などと連携し、その結果を「情報マニュアル」としてまとめて公開した。 ○社会教育主事室勤務では、研修担当として、社会教育主事等研修、社会教育指導員研修、青少年委員研修を企画運営した。特別区職員等の相談や指導に当たり、関係職員や指導者のネットワーク化及び研修の充実に努めた。

2. 国立社会教育研修所での実務	昭和 61 年 4 月 1 日～平成 2 年 3 月 31 日	社会教育計画講座、図書館職員研修などの 現職研修や、博物館職員講習などの資格付 与講習を担当した。社会教育主事講習にお いては、受講者の論文指導を、他の専門職 員と分担して受け持った。また、「社会教 育関係文献目録」等、資料集発行の実務を 担当した。
3. 昭和音楽大学短期大学部での実務	平成 2 年 4 月 1 日～平成 10 年 3 月 31 日	短期大学部全体の社会教育主事課程の科 目、社会教育概論、社会教育演習、社会教 育計画、社会教育実習を担当した。教職課 程についても、教育社会学を担当するとと もに、教職志望学生と双方向のコミュニケ ーションを図った。また、学生同士での話 し合いを組織し、支え合いを促した。
4. 徳島大学での実務	平成 10 年 4 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日	共通教養科目については「大学・市民・ボ ランティア」、市民公開講座科目について は「子育ての中の交流・コミュニケーション」 、「ホームページをつくる講座」、「子 育て交流インターネット入門」、「居心地 よい人間関係のつくり方ー私らしさのワ ークショップ」、「自分史の本を作る講座」 を担当した。そのほか「大学等地域開放特 別事業」や SCS 活用講座などを受け持った。 また、全学 FD 活動としての F D 基礎プロ グラムや応用プログラム（ワークショップ） の指導をした。そこでは、講義のノウ ハウ集や質問の仕方などの手引きを編纂 した。
5. 国立社会教育研修所での実務	昭和 61 年 4 月 1 日～平成 2 年 3 月 31 日	社会教育計画講座、図書館職員研修などの 現職研修や、博物館職員講習などの資格付 与講習を担当した。社会教育主事講習にお いては、受講者の論文指導を、他の専門職 員と分担して受け持った。また、「社会教 育関係文献目録」等、資料集発行の実務を 担当した。

6. 聖徳大学での実務	平成 16 年 4 月 1 日（～現在）	社会教育主事課程の科目、社会教育概論、社会教育演習、社会教育計画、社会教育実習のほか、教職課程については「児童学の基礎としての社会学」及び教育実習巡回、保育士等については各種実習施設巡回、キャリア科目については「キャリアコミュニケーション演習」などを担当した。 生涯学習研究所では、主催事業の運営の他、「生涯学習研究所紀要」の編集、「子どもお仕事デパート」、「生涯学習フォーラム（まちづくり×生涯学習）」などのイベントの運営に携わった。
7. 生涯教育文化学科の学科新設に当たっての実務	平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日	生涯教育文化学科の新設に当たり、学科教員のワークショップを組織し、「生涯教育文化学科の教育イメージ」を構造化して明示することによって、学科のカリキュラムマップの作成に貢献した。
8. 板橋区大原生涯教育センターに当たっての実務	平成 30 年 4 月 1 日～現在	子育て講座の講師として、母親の交流や相互理解を促すワークショップを指導した。中高生の居場所におけるユースワークを実施するなかで、これまで主張してきた社会化支援、個人化支援とは異なる「第 3 の支援」を理論化しようとしている。これについては、子どもたちの未来の充実とは異なる「いまの充実」を支えるためのプッシュ型とも、プル型とも異なる新たな支援理念であり、日々の居場所づくり実践における課題解決の方法を示唆するものとして精査しつつある。

現 在 の 職 務 の 状 況			
勤務先	職名	学部等又は 所属部局の名称	勤務状況

平成 年 月 日

上記のとおり相違ありません。

氏名 西村 美東士 印

著書

著書, 学術論文等の名称		単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
1	望月雅和『子育てとケアの原理』	共著	平成 30 年 4 月 13 日	担当部分「第 6 章 生涯学習と市民参加」、北樹出版、pp.143-166、24p、望月雅和（著、編集）、 <u>西村美東土</u> 、金高茂昭、安部芳絵、吉田直哉、秋山展子、森脇健介	第 1 節個人の生涯を輝かせる学習のために：1. 主体的な学習とは 2. 教育とは何か 3. 教育目標と教育評価、第 2 節生涯学習の基本理念：1. 教育を広く社会の視点からとらえ直す：学び合い、支え合う人々 2. インテグレート概念：時間的統合と空間的統合 3. 「持つため」から「存在するため」、「共に生きるため」の学習への転換 4. 生涯学習理念を支える社会教育の役割 5. 学校中心の教育観からの脱皮と生涯学習体系への移行、第 3 節生涯学習の未来像：1. 新しい生涯学習の方法 2. 資質・能力の構造化=カリキュラム作成の技法 3. 市民参加、参加と協働、シティズンシップ 4. まちづくりへの子どもの参画、親の参画
2	生涯学習の計画・施設論	共著	平成 15 年 4 月 18 日	担当部分「青少年教育施設の活動・経営をめぐる問題」、学文社、pp.153-167、15p、鈴木真理、守井 典子、 <u>西村美東土</u>	青少年教育施設の基本的性格と歴史をたどり、宿泊型施設における指導性と専門性の困難、青少年教育施設に求められる個人化／社会化機能等について論じた。また、「団体宿泊訓練への新たな理解」として、「究極的な主体はあくまでも個人であり、その個人化は、敬遠されるどころか、より望ましい社会化につながるものとして歓迎され、支援される」ことが重要だと主張した。

3	みんなぼっちの世界	共著	平成 11 年 5 月 20 日	担当部分「ネットワーク・ヒエラルキーからピアへ、ピアからネットワークへ」、恒星社厚生閣、pp. 133-134、2p、富田英典、藤村正之、 <u>西村美東士</u>	同一化せずとも『異なる他者』を受容することができるようになるための基本的信頼感、多少迷惑をかけあっても折り合いをつけることができるようになるための共感的理解の能力、自分らしさを現実のなかで実現するための実践的な自立力。以上の3点が、ネットワークにおいて重要であると主張した。
4	癒しの生涯学習(増補版)	単著	平成 11 年 3 月 10 日	学文社、172p	「『癒しの生涯学習』その後」の章を設け、次の節を付記した。1 三つの学歴社会を打破し、水平異質共生社会へ、2 自己決定や共感はしてもしなくてもよいものか、3 生涯学習と癒し＝内なる敗北主義から抜け出す方法、4 自己決定の人生と生涯学習、5 レスポンスの獲得方法、6 後向きを否定しないで、7 受容と共感の態度変容の支援方法、8 偶発的学習による態度変容＝毒と薬の両面価値の真実、9 成人学習者としての度変容、10 大人に対する心の教育や指導は可能か、11 わたしたちはどんな心をもちたいのか。
5	癒しの生涯学習	単著	平成 9 年 4 月 10 日	学文社、156p	青年期の葛藤、自立への煩悶の中で見出そうとしている個の確立への展望を、大学教師と学生という関係の中で、臨床的に明らかにしようとした。また、カウンセリングという具体的で実際的な手法で、「どう生きればよいのか」について探る指標を提示しながら、一方では、生涯学習の基本的な問題を描き出して、その問題解決を意図した。

6	学びのスタイル	共著	平成 8 年 10 月 15 日	担当部分「生活講座－ネットワークのつくり方」、玉川大学出版部、pp. 232-252、21p、赤尾勝己、山本慶裕、 <u>西村美東士</u>	1 自発性とは何か、2 パソコン通信によるネットワークの知、3 ピアコンセプト－協調や仲良しよりも知的水平空間のネットワークを、4 枝葉としてのネットワーク－の心構え、5 気づきと癒しのネットワーク－不信と孤立の同質上下競争から、信頼と共感の異質水平共生へ。
6	都市青年の意識と行動	共著	平成 7 年 5 月 10 日	担当部分「若者にとってのネットワーク形成の困難と可能性」、恒星社厚生閣、pp. 155-174、20p、高橋勇悦、川崎賢一、 <u>西村美東士</u>	神戸・杉並の青年意識調査結果を分析し、現代青年の問題の根底に、「みんなが同じことを考えて同じものを好きになること」を自分にも他人にも求めてしまい、そのために、自分を不幸にしたり、他者の個性や自由を蹂躪して迷惑をかけたりしてしまう仲間集団（ピア・グループ）の存在を見いだした。これを親密・淡白・親友不在の 3 グループの比較によって検討した。
7	成人学習論と生涯学習計画	共著	平成 6 年 3 月 1 日	担当部分「地方自治体における生涯学習計画の実際」、亜紀書房、pp. 111-157、47p、倉内史郎、土井利樹、 <u>西村美東士</u>	東京都生涯教育計画前史については、現実と理想の乖離、生涯教育計画の萌芽として、計画準備期については、「コミュニティ・カレッジ構想」の出現、「推進懇談会」の発足、社会教育計画と生涯教育計画の連動の前兆として、開始期については社会教育計画・生涯教育計画・総合計画の各期を分析し、その課題と展望を示した。
8	まちを創るリーダーたちⅡ	共著	平成 5 年 12 月 20 日	担当部分「私らしさ咲かせます、楽習のまち栃木県佐野市」、学文社、pp. 223-235、13p、福留強編	平成 4 年 12 月佐野市生涯学習推進協議会「佐野市生涯学習推進基本構想」これを生涯学習推進の中心に近代的な「個の確立」を据えているとして評価した。そして、ボランティア活動・社会参加活動までもが、楽

					しさを感じながら行われ、しかも、それぞれの「自分」が生きている価値をよく噛みしめて味わうことにつながっていると主張した。
9	生涯学習と学校 5 日制	共著	平成 5 年 4 月 30 日	担当部分「生涯学習と文化の街づくり」、エイデル研究所、pp. 74-86、13p、岩淵英之編	生涯学習社会のなかでの文化の位置については、「私は音楽はだめです」と平然とは言えない文化風土の重要性を提唱した。好きだからこそ行う生涯学習・文化活動の良さ、それぞれの文化活動の価値には序列がつけられないことについて論じた。その上で、「文化の街づくりの構想」として、「個」を歓迎する文化の空間づくりを提唱した。
10	社会教育委員必携	共著	平成 5 年 4 月 20 日	担当部分「学習情報の提供と相談体制」、学文社、pp. 176-185、10p、福留強編	学習情報提供の意義と方法については情報ネットワークの意味、システムの全体像、広域的全国的ネットワーク化の動向、実際の留意点について論じた。学習相談の意義については学習相談の意味、特徴、カウンセリングマインドの必要性、ネットワークとしての学習相談の運営方法について論じた。
11	人生の社会学	共著	平成 5 年 4 月 10 日	担当部分「現代青年の意識と行動」、学文社、pp. 31-46、16p、安藤喜久雄編	学生の「出席ペーパー」と教師のコメントという双方向のやりとりを俯瞰しながら、若者の人生の課題に応えようとした。身勝手な恋愛観、今の自分も他人も判断したくない気持ちなどの若者の傾向を指摘し、教育に対して「管理や保護よりも自由を」と提唱している。

12	こ・こ・ろ生涯学習	単著	平成 5 年 3 月 31 日	学文社、246p	本書の構成は次のとおりである。Ⅰ生涯学習するところとは何か＝1 フリーチャイルドの心をとりにどす、2 生涯学習理念はなぜ新しいのか、3 学校週 5 日制で問われる大人の主体性。Ⅱところを開く態度変容の学習＝1 ところを開いて交流できる仲間づくりの方法、2 授業の主体的な楽しみ方、3 情報へのネットワーク型アクセス。Ⅲ主体的学習へのいざない方＝1 学習相談がめざすもの、2 保護や管理ではなく自由への恐怖を与える。
13	生涯学習施設ネットワーク化	共著	平成 5 年 2 月 15 日	担当部分「学習相談の意義・方法・課題」、ぎょうせい、pp. 272-295、24p、岡本包治編	学習相談は、従来の日常的相談でも、現在の学習情報提供でもないとした。その上で、コンピュータの効果的活用と人間の介在の必要性について述べ、「ネットワークのなかでともに育つ」ことが重要であると主張した。
14	社会学の宇宙	共著	平成 4 年 11 月 25 日	担当部分「新しい情報収集へのステップ」、恒星社厚生閣、pp. 68-77、19p、川崎賢一、藤村正之、 <u>西村美東土</u>	新しい情報収集へのステップとして、過去の知の重力圏からの脱出、本の私有と共有の方法、電子化された情報・映像化された情報への対応、情報とストロークの発信方法などについて述べた。
15	社会学の宇宙	共著	平成 4 年 11 月 25 日	担当部分「授業の楽しみ方」、恒星社厚生閣、pp. 13-21、19p、川崎賢一、藤村正之、 <u>西村美東土</u>	学生の主体的な学習方法と、その支援としての授業のあり方について論じた。内容は、授業の楽しみ方、まじめな人の問題点、学生自身の主体の所在への問い、知のヒエラルキーへの対処方法とネットワーク型学習の方法などである。

16	教職研修 キーワード生徒指導	共著	平成 4 年 8 月 1 日	担当部分「野外活動・自然体験活動」「野外文化活動」「図書館」、教育開発研究所	「野外教育活動・自然体験活動」としては、自然体験重視の背景、自然体験の不足は何を招くか、社会教育での取り組みの概要などについて述べた。「野外文化活動」としては、用語誕生の経緯、事業のねらい、「図書館」としては、サービス内容、児童サービスの問題、図書館における青年のとらえ方について論じた。
17	季刊教育法	共著	平成 3 年 12 月 25 日	担当部分「社会教育の新しい展開からみた学校週五日制」、エイデル研究所、86 号、pp. 27-33、7p	1 青少年団体自身が拒否すべき安易な受け皿論、2 新しい土曜日の個別性、3 新しい土曜日が求める主体性、4 ヒエラルキーへの従属からネットワークの主体へ、5 「個の深み」と M A Z E (社会教育の新しい展開)。
18	生涯学習ナウ	共著	平成 3 年 11 月 13 日	担当部分「青少年と生涯学習」、日本教育新聞社、pp. 161-181、21p、福留強編	「生涯学習における少年教育の推進」については生涯学習としての少年教育の特徴、体験・参加・参画のもつ教育力、地域・集団のもつ教育力を指摘した。 「生涯学習における青年教育の推進」については、仲間や社会との交流によって深まる青年の個と、これを尊重し助長するための視点について論じた。
19	生涯学習ナウ	共著	平成 3 年 11 月 13 日	担当部分「学習情報の提供」、日本教育新聞社、pp. 271-285、15p、福留強編	学習情報提供の意義、コンピュータ活用、各種メディアの有効活用、ギブ・アンド・テイクの情報交流について論じた。
20	社会教育計画	共著	平成 3 年 11 月 5 日	担当部分「地方自治体の役割ー学習プログラム作成の視点からとらえる」、学文社、pp. 144-168、25p、倉内史郎、鈴木真理、 <u>西村美東士</u>	団体中心主義から施設中心主義への転換、ピラミッド型からネットワーク型への転換、ネットワーク型問題提起の公的役割について、その意義を主張した。また、「年間事業計画の作成」については地域実態・行政実態

					の把握、学習要求の把握、「公的課題」の優先、学習課題の整理等の重要性を指摘した。
21	生涯学習とまちづくり Q & A	共著	平成 3 年 8 月 30 日	担当部分「学習情報提供と学習相談の体制づくりの意義と方法」、第一法規出版、pp. 98-100、3p、岡本包治監修	学習情報提供と学習相談の体制づくりのために、次の 3 点について説明した。1 学習情報提供の意義と内容。2 学習情報提供の具体的方法とネットワーク化、3 学習相談の意義と方法。
22	生涯学習か・く・ろ・ん	単著	平成 3 年 4 月 25 日	学文社、237p	本書の構成は次のとおりである Ⅰ「個の深み」への注目、そして、支援＝1 社会教育における組織と個人、2 講義型学習と社会教育、高等教育、3「個の深み」を支援する講義技術。Ⅱ情報の主体的な受信・発信をめざして＝1 現代都市青年と情報、2 パソコン・パソコン通信と青年、3 パソコン通信は生涯学習に何を与えるか。Ⅲ主体的な学習を個人がとりもどすために。
23	生涯学遊ネットワーク	共著	平成 1 年 10 月 10 日	担当部分「ロール・プレイングの活用」「団体・グループの仲間づくりの演出」、日常出版、pp. 70-76、87-90、4p、福留強編	青年にとっての団体・グループの仲間づくりとして、みんながしゃべる会議、寝食を共にする合宿の意義について論じた。ロール・プレイの活用については、てれないこと、実感をともなって見ることによって、「信頼感」を呼びおこすことができるとした。
24	生涯学習ハンドブック	共著	平成 1 年 8 月 1 日	担当部分「高齢者教育の学習課題」、第一法規出版、pp. 190-191、2p、山本恒夫編	ジェネレーションとライフステージのとらえ方、個人的課題と社会的課題の関連について論じた上で、学習課題の実際の領域を示した。

25	メディア革命と青年	共著	平成 1 年 6 月 15 日	担当部分「パソコン・パソコン通信と青年ー成熟したネットワークとは何か」、恒星社厚生閣、pp. 109-141、33p、高橋勇悦、川崎賢一、 <u>西村美東土</u>	パソコン通信の経済性について述べた上で、スタンド・アローンであるパソコンがネットワークすることの意義、パソコン通信における新しい「知」の誕生と「集団」の形成について論じた。
26	現代公民館全書	共著	平成 1 年 5 月 18 日	担当部分「ヒューマンネットワークと人材活用」、東京書籍、pp. 266-282、17p、湯上二郎、坂本登、加藤雅晴、野島正也、 <u>西村美東土</u>	公民館と地域組織・団体との協働の意義を明らかにした。また、自主的学習グループ・サークルの育成と援助及びグループリーダー養成事業について、その対象、方法、内容のあり方を論じた。
27	生涯学習の方法	共著	平成 1 年 4 月 1 日	担当部分「生涯学習の原理」、実務教育研究所、pp. 7-32、26p、高桑康雄 本家正文、 <u>西村美東土</u>	生涯学習においては個人性の原理が重要であるとした上で、学習活動の発展段階に応じた援助方法及び生涯学習の方法について論じた。
28	学習情報の提供と活用	共著	昭和 62 年 8 月 28 日	担当部分「学習情報の提供と活用の実際」、実務教育出版、pp. 95-122、28p、山本恒夫・清原慶子、 <u>西村美東土</u>	いくつかの自治体の学習情報提供事業の事例を挙げ、縦割行政の打破、民間情報の提供、提供できない情報への問題意識、自由で文化度の高いイベントの開催などの重要性を主張した。
29	学社連携の理念と方法	共著	昭和 62 年 8 月 10 日	担当部分「学社連携の具体的方策」、全日本社会教育連合会、pp. 127-146、20p、日高幸男 福留強、 <u>西村美東土</u>	少年団体と学校とが連携を図っている事例として、名古屋と横浜の子ども会について、教師から郷土について学んだり、郷土資料の収集・展示をしたりしている事例として、埼玉県上尾市・与野市小学校 P T A について分析した。

30	青年そして都市・空間・情報	共著	昭和 62 年 4 月 10 日	担当部分「現代都市青年と情報－ヤングアダルト情報サービスの提唱」、恒星社厚生閣、pp.115-156、42p、高橋勇悦、田中治彦、平林正夫、 <u>西村美東士</u> 、川崎賢一、内藤辰巳	「青年の情報環境」について、情報化不適應、情報の特質、限界、情報能力と情報必要の観点から、その実態を把握した。また、「ヤングアダルト情報サービス」として、1 青年の要求情報・必要情報、2 人間の情報、3 生活の情報、4 連帯の情報、5 地域情報と行政情報の 5 つの情報提供の重要性を主張した。
31	社会教育の計画とプログラム	共著	昭和 62 年 1 月 25 日	担当部分「学習情報提供事業の企画と展開－人間が学習情報を求めている」、全日本社会教育連合会、pp.291-306、16p、岡本包治、小山忠弘、福留強、 <u>西村美東士</u>	学習情報提供においては、新鮮な情報の収集、情報ニーズへの対応、収集情報の領域の拡大、地域情報・行政情報の重視などが重要であるとした。また、情報ネットワークシステムにおいて、市民自身の手による調査・研究と連携するよう提唱した。

学術論文

著書, 学術論文等の名称		単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
1	科学研究費研究成果報告書『個人化する若者に対する社会化支援における暗黙知の解明』	単著	平成 30 年 7 月 1 日	平成 28・29・30 年度科学研究費研究成果報告書『個人化する若者に対する社会化支援における暗黙知の解明』(研究課題番号 16K04564、研究代表者西村美東士)、pp. 1-3	本研究の対象を、青年期対象社会教育事業、民間団体活動、学校のキャリア教育、コミュニケーション教育、参画教育、就労支援、グループホーム、若手社員 OffJT、その他 ESD 等における活動とし、これら諸活動における若者支援の課題を明らかにした上で、これに基づく優れた支援者の「指導活動」について「技能分析表」を作成する。その作成にあたって、「なぜ、どんな理由で、どの程度」という「暗黙知インタビュー」を行うことによって、支援者自身が言語化できていなかった「暗黙知」を、言語、画像、映像などによって可視化した。
2	2017 年度日本子育て学会第 9 回大会サテライト大会報告—子育て者の思いに応える子育て学を目指して	単著	平成 30 年 3 月 31 日	日本子育て学会『子育て研究』第 8 巻、pp. 46-51	第一は、「自己変革」に関する問題である。親のものの見方、考え方にまで、どう立ち入って、支援を行うのか。そこには、今までの「子育て学」からはこぼれ落ちた問題が山積している。第二は、ネット、SNS などの活用に関する問題である。ネットや SNS などの非対面コミュニケーションにより、対面コミュニケーションがおろそかになるという「言説」があるが、少なくとも表面上の事実は逆なのである。第三に、「自分らしい子育てをしたい」、「自分のための時間も大切にしたい」という親の欲求が強まっている。これは社会の個人化の動向と呼応した個人化傾向ととらえることができる。

3	若者との協働による価値創造の新しい方向	単著	平成 29 年 10 月 1 日	日本青年館『社会教育』856 号、 pp. 56-63	個人化社会における若者の困難にも関わらず、その問題意識のもとで価値の創造を目指す。個人化社会が求める個人と、その自己決定能力は、どのようにしたら育つのか。青年関連行政が数値目標などをあげて、参加者を増やそうとしているが、それは「目標」ではあっても「目的」ではない。大きな目的の一つは、個人化社会における自己決定能力そのものを養うことであり、これを若者の社会化と一体的に行うことである。そこには、きわめて高い教育的、専門的見識が要求される。
4	意見対立を避ける若者たちの増加に対応した育成方法	単著	平成 27 年 10 月 1 日	基盤研究(A)(研究課題番号 23243065)、平成 23・24・25 年度科学研究費研究成果報告書『流動化社会における都市青年の経時的実証研究』、pp. 48-50、 3p、研究代表者藤村正之	貫徹志向と状況対応、交渉と非交渉の 2 軸から 4 タイプを設定し、10 年間の量的変化を調べた。「多元的自己」の現実社会における有効性を論ずる場合、その状況対応力はプラスとしてとらえられるだろうが、交渉力が伴わないとしたら関係調整力としては十分とはいえないと考える。その点では、現在、指摘されている 2 つの傾向についても、あわせて検討する必要がある。教育においては、一元的価値観を押し付けるのではなく、各タイプに応じたあの手この手の育成方法を検討する必要がある。
5	松戸市社会教育計画の方向性を探る — 情報提供・相談	単著	平成 27 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、13 号、pp. 38-40、3p	市民の暮らしのなかで、ICT の基盤整備は、「協働のまちづくりの担い手」や「多様な主体同士の協働」に結びつくものとは必ずしもいえない。課題の解決のためには、学習機会を直接的に提供する事業だけでなく、市民の情報提供、情報交流の場面で、望ましいまちづくりに向けた内容が拡大するよう効果的に働きかける「情報相談事業」の開発が求められる。

6	キャリア教育のための暗黙知教材の開発	単著	平成 27 年 3 月 31 日	平成 26 年度選定放送大学教育振興会助成研究（研究代表者）、『キャリア教育のための暗黙知教材の開発』、80p、80p	本研究の特色は、キャリア教育の一環として、対人能力に関わって、優れた営業、販売、企画、人事、経営などの暗黙知を伝える教材作成の方法論を確立し、効果的な利用方法を提案することにある。とりわけ、通信教育においては、これをメニュー方式で独習できる教材、また、スクーリング指導に活用し得る教材が求められるが、この実現を意図している。具体的には、営業、販売、接客に関する仕事について、ベテラン社員の仕事ぶりに関する動画撮影と、それをもとにしたインタビューによって技能分析表を作成する。さらに、暗黙知に関わるマルチメディア教材の作成を行い、その効果を検証しようとした。
7	意見対立を避ける若者たちの増加に対応した育成方法	単著	平成 27 年 3 月 31 日	基盤研究(A)(研究課題番号 23243065) 平成 23・24・25 年度科学研究費研究成果報告書『流動化社会における都市青年の経時的実証研究』、pp. 48-50 (研究代表者藤村正之)	状況志向の「多元的自己」（浅野智彦、2008）の傾向や、SNS 等の普及が、若者の人間関係の希薄化には必ずしもつながるものではない。それでは、若者の教育の観点からは、何が問題になるのか。貫徹志向と状況対応、交渉と非交渉の 2 軸から 4 タイプを設定し、10 年間の量的変化を調べた。状況対応非交渉型と貫徹志向非交渉型がともに 7 ポイント程度増え、交渉型が減った。中でも、貫徹志向交渉型は、10 ポイント以上減った。「多元的自己」の現実社会における有効性を論ずる場合、その状況対応力はプラスとしてとらえられるだろうが、交渉力が伴わないとしたら関係調整力としては十分とはいえないと考える。

8	若手社員育成の課題と方法－「組織の中で個性を発揮する人材」に育てるには〔査読付〕	単著	平成 26 年 9 月 30 日	日本生涯教育学会、『日本生涯教育学会論集』、35 号、pp. 71-80、10p	第一に、若者の社会化(組織適応)と個人化(個性発揮)の促進の両側面の視点から、若手社員育成の実態と課題を整理し、世代間ギャップ及び育成する側とされる側のギャップの問題を見出した。第二に、1992 年、2002 年、2012 年都市青年調査の経時変化の分析により、「意見対立を避ける若者たち」の増加を見出した。また、貫徹志向と状況対応、交渉と非交渉の 2 軸から 4 タイプを設定し、比の差の検定によって各タイプの特徴を明らかにした。その上で、「組織の中で個性を発揮する人材」に育てるためには、若手社員の個人化と社会化に関する各タイプの達成状況及び特徴に適した育成が求められると結論付けた。
9	社会形成者の育成の観点に立った生涯教育学序説 (2)－若者の 10 年間の変化とその対応のあり方〔査読付〕	単著	平成 26 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、12 号、pp.	筆者が所属する青少年研究会の神戸・杉並の若者調査のデータから、2002 年と 2012 年の経時変化を分析した。その結果、各タイプの特徴と、10 年間の変化に対応した育成方法が導き出された。社会形成者の育成にあたっては、この分類に基づいて、個人課題を与える、同じタイプの者同士でグループを作らせてワークをさせる、違うタイプの者と交流させるなどの効果的な方法を用いて、計画的な目標達成を行うことが求められていると結論付けた。
10	社会形成者の育成の観点に立った生涯教育学序説 (1)〔査読付〕	単著	平成 25 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、11 号、pp. 1-29、29p	本研究の分析の枠組みとしては、分野については、①教育方法、②集団形成、③ I C T 活用、視点については、①対面志向、②個人志向、③癒し志向、④社会開放志向、⑤社会形成志向のマトリクスを想定する。これを、筆者自身の関心に沿って、社会状況の変化、社会形成に関わる研

					究成果、団体等の活動、自治体の生涯学習推進施策、国の教育政策などの動向と対照させながら再検討する。
11	ICT を活用した学科キャリア教育の方法と効果〔査読付〕	共著	平成 25 年 2 月 27 日	聖徳大学 FD 紀要、『聖徳の教え育む技法』、7 号、pp. 63-73、11p、 <u>西村美東士</u> (筆頭)、清水英男、長江曜子、斉藤豊、齊藤ゆか、林史典	ICT における電子掲示板システム、ペーパーレス・カード式発想法システム等を、通常のリアル授業に付加して活用した。今回の結果からは、自己内対話効果と対他者協同効果の分離が示唆された。キャリア教育に多用されるワークショップの場面において、学生の協同（課題設定等）→沈思黙考（カード書き込み）→口頭コミュニケーションによる協同（カテゴライズ作業等）→協同・沈思黙考（振り返り）というプロセスに関して、ICT 活用分析を通して、自己内対話と協同の相乗的促進のための、評価付与、揺さぶり、新たな課題提示などの教師の指導行為の方法と効果を検討する必要がある。
12	個人化の進展に対応した新しい社会形成者の育成ーキャリア教育及び青年教育研究の視点から〔査読付〕	単著	平成 24 年 11 月 10 日	日本生涯教育学会年報、33 号、pp. 145-154、10p	「個人化の進展に対応した新しい社会形成者の育成」というテーマは、一見、自己矛盾した課題のように捉えられよう。しかし、個人内のスパイラル過程の理解が、その解決策となると考える。「即自」とは、自分自身で感じたまま対処する状態である。個人は、ここから出発し、「対自」において、自分自身を見つめて、問題をどう解決するかを考えるようになり、やがて、「対他」において、他者との関わりを考えるようになり、対社会に発展する。そのことが、社会における自己の適正な位置づけにつながり、社会形成者として必要な能力を獲得することになる。

13	社会化・個人化の視点から見たキャリア教育の課題—生涯教育文化学科におけるキャリア教育体系化モデル設定の試み〔査読付〕	単著	平成 24 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、10 号、pp. 23-29、7p	文献研究により、次の課題を導き出した。①具体的な仕事内容の理解促進、②必要な職業知識の明確化、③具体的必要能力の明確化、④学生個人の「職業への構え」の育成、⑤職業上必要な交信力と論理力の育成、⑥社会対応型能力活用力の育成。フォーマルな学校教育の視点からは、これらの多くは困難、または限定的な課題であるが、職業能力の明確化によって学習目標の設定を提示することができる。また、これまでフォーマルな学校教育が苦手としていた分野について、グループワーク等の内容や方法の導入のあり方を提示することができる。
14	生涯教育文化学科におけるキャリア教育体系化の試み—学科教員による専門教育の実践とその成果から〔査読付〕	共著	平成 24 年 2 月 27 日	聖徳大学 FD 紀要、『聖徳の教え育む技法』、6 号、pp. 103-114、12p、 <u>西村美東士</u> (筆頭)、長江曜子、清水英男、斉藤豊、齊藤ゆか、林史典	専門科目「総合特別講座Ⅳ—情報と職業」（4 年次）を取り上げ、その分析をとおして、「自分がその職業をめざす理由について、『好きだから』ではなく、『このようなことを、このようにしたいから』という展望をまとめることができる」という教育目標についての効果を確かめた。現在の学生の立場からではなく、未来の職業人の立場から現実的、主体的に職業に向かう態度を身につけさせるための課題提示によって、感覚的次元ではなく、実際に働くこと具体像を深めて、P D C サイクルを可能にし、企業人事側のいう高業績遂行能力としての「キー・コンピテンシー」における現実的、主体的な問題意識、論理的思考、関係調整力などを育てる効果があった。

15	生涯教育における「癒し」研究の展望〔査読付〕	単著	平成 23 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、9 号、pp. 29-35、7p	本研究の前半では、個人化を社会化と一対のものとしてとらえるとともに、「癒しによる原点回帰機能」を両者の結節点として位置付けることによって、個人の社会化過程を全体的に俯瞰するプロセスモデルを設定した。後半では、学生の癒しニーズの分析から、「原点志向」と「閉鎖志向」の 2 つの癒し因子を見出した。このことから、「癒し志向」の特性について、「自己の原点への回帰」と「社会との窓の開閉」の 2 軸で分けられる 4 類型が示唆された。
16	ユーザーニーズの把握に基づく子育て商品開発の授業実践—シミュレーション型授業の実践を中心として〔査読付〕	単著	平成 22 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、8 号、pp. 29-33、5p	需要予測と供給可能性に関する認識については、当初の学生の単純な楽観的見通しからの脱皮と、需要の問題点のチャンスとしてのとらえ直しという側面で、一定の深まりを見せた。このことから、子育て商品の企画を通じた参画授業のなかには、自己の受給の認識が、現実の子育て商品市場にそぐわないことに気づき、修正する過程があったと見ることができる。しかし、今回は、「教育」のためのシミュレーションとしての参画にとどまらざるをえなかった。今後は「参画のための教育」を追究したい。
17	子育ての暗黙知に関する研究—映像解析による保育者の子育て支援行動の分析	共著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 411-422、12p、森和夫、加藤敏子、西	熟練した保育者は「場の概念」→「到達目標概念」→「手段と時間の概念」→「空間上の運動概念」という流れで活動が行われる。しかし、具体的な行動に至るまでのプロセスには省略された部分があると考えた。第一に、子どもをとらえると同時に行動に移す場面が想定された。第二に、計画化に際しては、過去のストラテジを参照しつつ、より充実した計画化を図るのではないかとした。このようにして子育ての暗黙

				智子、津留明子、 位田かつ代、 <u>西村 美東土</u>	知を考えれば、より有益なノウハウ や事実認識などの情報が逐次入手で できると考えた。
18	子育て支援文献デ ータベース化の条 件－多様な情報ニ ーズに対応する紐 付け提案型システ ムをめざして	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17～21 年度研 究集録』、pp. 395- 410、16p	要旨文脈分析方式による文献分析が 妥当であるとする一連の仮説は、一 定の検証を得たと考える。しかし、 検索者の非恣意性等の自由語検索の 弱点を考慮すれば、子育て支援文献 のデータベース化にあたっては、基 本的には要旨文脈方式を採用すると ともに、自由語検索の弱点を補うた めに、シソーラスを構築し、その活 用方式を併用できるようにすること が望ましい。また、子育て情報ニー ズの特徴を考慮すると、「同義語検 索」や「シソーラス検索」とは異な り、多様な情報ニーズの動向に対応 して、データベースの側から「検索 結果」とは異なる関連情報を「紐付 け」して提案するシステムが必要と 考えた。
19	子育て支援インタ ーネット・マルチ メディア活用に関 する研究	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17～21 年度研 究集録』、pp. 391- 394、4p	インターネット、マルチメディア関 連については、子育て支援社会連携 研究の構想原案作成段階において は、次の諸点のとおり整備したいと 考えた。①地域子育て情報について は、書籍や資料のほか、マルチメデ ィアも利用できるようにする。②数 台のノートパソコンを用意し、市民 や学生が個人研究もできるようにす る。③インターネットによるテレビ 会議システムを活用した能動的な学 習ができるようにする。④マルチス クリーンは 4 面分割投影もできるよ うにする。⑤無線 LAN により、ノ ートパソコンを持ち込めばインター ネットにつながるようにしておく。

20	クドバス活用による子育て支援社会連携研究センター事業評価に関する研究	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 353-358、6p	支援センターの機能に関する「クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）チャート」成果を利用して、「センター評価票試案」を作成し、期待できる効果を検討した。本試案は次の効果が期待できる。①「必要度／達成度」から、事業計画における優先度を導き出すことができる。②各機能について、1 と 2 を灰色系、3 を青系、4 と 5 を赤系の色で棒グラフのように塗りつぶせば、可視的に「温度差」を表すことができる。③本票の右半分をセンター職員の職能により、1:できない、2:指導者がいればできる、3:一人でできる、4:工夫や改善ができる、5 職員に教えることができる、の 5 分類で分析すれば、適正な人員配置計画や効果的な研修計画が可能になる。
21	クドバスワークショップによる子育て支援社会連携研究センター機能の検討	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 347-352、6p	センター機能に関する「クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）チャート」を作成し、その成果を分析して、求められるセンター機能の全体像を検討した。その結果、「ネットワーク系」の機能の得点が最大であり、機能カードの内容から、機関間連携でもあり、人的ネットワークでもあることがわかった。また、「商品開発」の得点は低い、ネットワーク構築のなかで実現すべき機能であると考えた。さらに、場や情報の提供など、親を直接対象とする「サービス系」の機能の得点が高いが、その一つ一つは開発的であり、親の自己形成とともに、社会的課題を意識し、よりよい社会形成を目指したものが多くことなどがわかった。
22	子育てまちづくり政策検討の実質化	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社	「佐野市生涯学習都市宣言」起草文原案の作成過程においては、次の方

	の試みー佐野市における政策立案過程を通じて			会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 323-344、22p	法によって、市民参画を一定程度実質化することができたものと考え る。①ワークショップによって生涯学習推進イメージが共有でき、委員の協働作業としての文章化の成果を得ることができた。②その成果と原案修正結果をフォローアップするための会議を開き、ワークショップに欠席した委員も含めて「原案修正」に関わる合意形成を図ることができた。③原案作成者は、フォローアップで形成された合意のほか、前年度からの協議会での検討結果も踏まえ、委員一人一人の「背後の想い」まで推察しながら、それを宣言文に反映させることができた。
23	松戸の親子・子育て産業振興に関する研究	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 185-188、4p	松戸市内の事業者の参加を得てクドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）・ワークショップ「わが事業所ができること」を実施し、その成果から、事業所の参画を実現するための要素を抽出した。その結果、事業者の提出した能力カードについては、「わが事業所」や自分自身がもつ、子どもたちへの教育機能を提供しようとする意志が強く表れていた。これは、事業者と親・市民との「協働」（それぞれの立場を生かした協力）の意義とともに、「共同」（同じ立場からの協力）の可能性を示すものととらえられる。

24	社会開放型子育て観への転換プログラムの提案－豊島区家庭教育推進員の子育てまちづくり研究活動を通して	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 163-182、20p	豊島区家庭教育推進員の子育てまちづくり研究活動は、第一に、自治体の行政計画等によるまちづくり計画と連動しつつ、第二に、「わが子とともに、わが子を対象として」、第三に、「自らの仮説に対する責任をもった実践的検証」を行うという意味で、「子育て学習」と「子育てまちづくりへの参画」を一体的に推進するものといえる。「交流・ワークショップ型子育て学習」では、他の親と交流することによって、より効果的に社会化が促進される。「学習参画型学習」では、学習を自ら組織する活動を通して、まちの人々や諸機関と連携することによって、社会的視野が拡大される。「まちづくり参画型学習」では、自分たちでも達成できる範囲での子育てまちづくり活動を行うことによって、社会的存在としての自己を高めていくと考える。
25	女子教育における社会化支援とその評価に関する研究－社会開放型への転換の効果	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 133-144、12p	クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）型授業によって、学生は、「一人では限界がある」が、自分が積極的に提案し、他者の「個人の事情」や「情念」（KJ 法の場合）等に立ち入ることなく、積極的に推察し、交渉し、協働することによって、実用的なプロダクトを作成し、達成感を得ることができた。社会化の一定の側面で、学生の普段の生活では減少しつつある気づきのチャンスを与えたものといえよう。しかし、質的には低次のものであったと考えられる。なぜなら、情念の交流ではなく、考え方、合意事項という一定の壁の中でのワークであったからである。

26	女子学生の社会開放型の子育て観を育む技法－出産・子育ての自己決定能力のための学習を通して	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 119～132、14p	教師の指導内容と空白時間の分析等により、仮説「クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）を活用して女子学生自身の社会化欲求に対応したワークショップ型授業を行うことによって、「子を産む性をもつ者」として必要な社会化を効果的に促進することができる。」を検証しようとした。出産のもつ社会的側面については、今や多くの女子青年にとって魅力のないものになってしまっていると考えられるからである。そういう状況の中、「子育てまちづくり」への参画は、出産、子育てが、社会に対しても自負できる行為として輝きを取り戻すための一つの有力な要素と考える。
27	効果的子育て学習の方法とその支援－学習過程における母親の気づきと社会化	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 97～118、22p	数種類のワークショップの手法を活用することにより、安心感と緊張感、他者への気づきと自己への気づき、学習集団内の共通性と一人一人の個性、個人の悩みの共同解決と自己解決等の往復が母親たちに見られた。これらのペアを二項対立的にとらえるならば、どの気づきにはどの支援が効果的かという発想がなされよう。しかし、実際には、現実の気づき過程は上下を往復しながら深まることが明らかになった。効果的な支援方策のためには、個人や集団の気づき過程を把握して、必要に応じて左右の二項を往復させ、気づき過程と交差させることが適切と考えた。
28	クドバス活用による親能力確実習得プログラム研究	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖	クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）を活用して学習内容を編成し、その成果の妥当性を検討した。さらに、その成果をもとに評価票を作成し、学習プログラムの実践にお

				的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 87-96、10p	いて、その実際の効果を実証的に検討した。学習スケジュール作成の段階にあつては、比較的容易に、テーマごとの学習目標を設定することができた。また、そこで設定された学習目標は、各回の担当者及び講師にも明確に認識されるし、他の回とは重複しないため、支援が責任をもって目的的に行われるという実践面での大きなメリットが期待できる。本研究で得られたこのような知見は、本論の冒頭で述べたような「子育て学習の内容編成作業の組織化」や「学習機会提供事業の到達目標の設定」の意義とあり方を示すものとしても有効であると考えた。
29	「参画型子育てまちづくり」から見た社会開放型子育て支援研究の展望	単著	平成 22 年 3 月 31 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17～21 年度研究集録』、pp. 1-14、14p	「参画型子育てまちづくり」は、「個人の自由意思」によるものでありながら、社会における自己の役割を果たしつつ社会形成に関わる活動といえる。そこでは、子育て活動のもつ、仲間との交流や、まちの子育て行政との関わりを通じて社会との交流が行われる。その結果、個人を社会化させる促進要因が明瞭に示されることになる。そのプロセスと効果を明らかにすることによって、「個人完結型子育て観」と対置される「社会開放型子育て観」への転換の展望と、これをもとにした子育て支援のあり方を提示できる。。
30	未来の母親に対する社会化支援の方法と効果ー子ども・友達・親・社会との関わり度を中心にー〔査読付〕	単著	平成 21 年 3 月 31 日	聖徳大学児童学研究所紀要、『児童学研究』、11 号、pp. 39-48、10p	評価指標は、①他者理解の方法と可能性、②自分らしさと社会性、③若者の社会関係の 3 点について、子ども・友達・親・社会との関わり度と自己との関係を中心に設定した。対照群の講義型授業と比較して、とくにクドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）型授業の場合に、劇的変化

					が見られた。クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）の場合、①自分が提案・仲間で分類・きれいに位置づ、②チームで考える・決める、③一人の限界と他者との関わりの意義づけを体得できるという理由から、関わり度が高まったのだと考えられる。しかし、情念レベルでの共有度については劣っていた。
27	「参画型子育てまちづくり活動」から見た生涯学習推進の展望〔査読付〕	単著	平成 21 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、7 号、pp. 39-49、11p	子育てをする親という「子育ての源流（ニーズ）」としての「個人」と、子育てまちづくり活動への参画の「連鎖」の、両軸から「子育て小売店研究」を位置づける必要がある。子育て活動・子育て学習からの発想・提案によって、源流が「子育て商品開発」というかたちで市場に至り、子育て活動の中で消費・活用され、当然ながらその使用感、その良さ、その特徴によって引き出される新たなニーズが源流となる。これによって、その発想・提案が商品開発に還元される。
31	市民参画を実質化する生涯学習推進の方法論(序論)－佐野市の生涯学習諸会議でのワークショップスタイルの導入と成果〔査読付〕	単著	平成 20 年 9 月 30 日	日本生涯教育学会、『日本生涯教育学会論集』、29 号、pp. 13-22、10p	市民メンバー全員が出席して、議論を重ねて合意形成に至るという従来の活動形態は困難になっている。「生涯学習都市宣言」起草案原案作成過程においてクドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）を適用した結果、効率的にチームとしての改訂作業をすることができ、その成果は欠席者を含めたメンバー全員の合意として確認され、共有された。また、クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）を適用した結果、居場所機能ごとの達成目標が構造的に把握されたため、共有された目標を前提としたメニューづくりが可能になった。

32	文部科学省委託事業学びあい支えあい地域活性化事業に関する調査研究報告書	単著	平成 20 年 3 月 28 日	担当部分「商工会活動から発展したふるさとの振興と後継者育成」、全日本社会教育連合会、pp. 39-43	「生涯学習のまちづくり」の視点からは、「学びあい、支えあい」によって、市民が個人として充実し、社会の中で、つながり・広がり・深まり、社会を形成し、それが、市民一人一人の「私らしさ」や「自分さがし」に還元される展望を示すことは重要な意義をもつ。
33	文部科学省委託事業学びあい支えあい地域活性化事業に関する調査研究報告書	単著	平成 20 年 3 月 28 日	担当部分「学びあい、支えあいによる自己形成と社会形成の一体化」、全日本社会教育連合会、p. 117-118	「子育てのまちづくり」の視点からは、親が、子育て仲間をつくり、子育て学習のなかで学びあい、支えあい、「子育てのまちづくり」の中で役割を果たしてこそ、わが国の少子化インパクトは軽減される。
34	子育て学習の構造的な理解序説－親の社会化支援の視点からの整理〔査読付〕	単著	平成 20 年 3 月 21 日	聖徳大学児童学研究所紀要、『児童学研究』、10 号、pp. 1-10、10p	第一に、学習集団に受容的雰囲気形成され、互いに安心して自己開示を交換することが、対自、対他、対社会の気づきに対して与える効果と逆効果について、主にプロセスの視点から検討した。第二に、これまで明らかにしてきた青年たちの場合の社会化過程の研究成果に基づき、研究 1 で明らかにした気づき過程と、親能力に関する大学授業の研究成果とを比較して検討した。第三に、主に P T A 会員による「子育てのまちづくり」への参画型学習の成果について、子育て学習グループによる親能力リスト作成に関する学習成果と比較した。
35	Supporting Ideas and Methodology of Youth Socialization in Japan	単著	平成 20 年 3 月 21 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、6 号、pp. 43-46、4p	We have tried to clarify the transition of the appearance ratio of keywords about the youth socialization. There are "unchangeable themes" that should not be influenced by the "wave of the times". They are the themes about the "self-formation" such

					as "self-consciousness", the theme around "entrance" of the youth socialization such as friendship, association, the theme that connects "self-forming" and "community assembly" such as family, child discipline, and socialization. It is important whether these themes can take root or not.
36	佐野 J C 及び 柏 J C における青少年育成活動の研究	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島 鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17・18 年度研究集録』、pp. 207-208、2p	佐野及び柏の J C (青年会議所) の行う青少年育成活動に対して、「子育てまちづくり」の観点の導入を働きかけ、その効果を検討した。研究 1 では、佐野青年会議所による「夏の冒険・鉢の木むら〜つたえよう わたしのたから〜」事業に対する準備段階からの関与観察を行った。研究 2 では、社団法人柏青年会議所「心あるひと育成委員会」による「「地域安全マップ作り」事業に対する準備段階からの関与観察を行った。その結果、子どもたち自身が参画活動を行うことの重視が見出された。
37	学生による「子育て支援研究」教育効果の研究	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島 鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17・18 年度研究集録』、pp. 187-194、8p	本研究では、クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）を活用した「出産自己決定マニュアル」作成をとおして、「子育てまちづくり研究」に参画させることによる効果を検証しようとした。その結果、「他者との関係や職場における自己のもつべき能力の客観的な位置づけ」、「自己内対話の促進」、「課題・目標の自己設定、共同設定」という機能の面からいえば、「子を産む性をもつ者」としての女子学生の望ましい社会化を支援するためには、効果的な技法であることが明らかになった。

38	豊島区家庭教育推進員による子育てまちづくり計画策定	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17・18 年度研 究集録』、pp. 159- 170、12p	豊島区家庭教育推進員の毎月の集合 学習の場を利用して、推進員である 母親たちに対して、各地区における 「子育てまちづくり計画」の策定を 指導し、その経過と成果を検討し た。従来の親教育の研究において、 「学習成果の社会還元」の重要性に ついては認識されていたが、自分た ちの学習成果である「提案」を現実 化して社会還元としての成果に結び つけるためには、行政や関連機関と の協働に向けた学習が必要になる。 このことから、親の学習という自己 形成の営みと、学習成果のまちづく りへの反映という社会形成の営みと が循環し、一体化して行われる動的 構造を明らかにすることが必要とし た。
39	佐野市生涯学習推 進における「子育 てまちづくり」の 検討	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17・18 年度研 究集録』、pp. 151- 154、4p	佐野市生涯学習推進における答申作 成過程における委員の青少年育成及 び子育てのまちづくりに関する発言 内容を、「社会化促進要因」の視点 から逐語的に分析した。その結果、 以下の 4 点が結論づけられた。① 「まちづくり推進」という公的課題 の学習において、生涯学習推進関係 者のあいだでは、青少年と親の社会 化不全の状況が問題視された。②社 会化不全状況の解決のためには、先 述の「社会化促進要因」が重要であ ると認識された。③「まちづくり推 進」において、これらの「社会化促 進要因」を活性化するための方策に ついては、委員発言および起草結果 から、「居場所」、「参画」、「仲 間づくり」などに関して、実践的で 有益な一定の提言が行われた。

40	クドバス活用による親能力確実習得プログラム研究	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17・18 年度研 究集録』、pp. 129- 136、8p	クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）を活用して学習内容を編成 し、その成果の妥当性を検討した。 さらに、その成果をもとに評価票を 作成し、学習プログラムの実践にお いて、その実際の効果を実証的に検 討した。学習スケジュール作成の段 階にあつては、比較的容易に、テー マごとの学習目標を設定することが できた。また、そこで設定された学 習目標は、各回の担当者及び講師に も明確に認識されるし、他の回とは 重複しないため、支援が責任をもつ て目的的に行われるという実践面で の大きなメリットが期待できる。
41	松戸の親子・子育て産業振興に関する研究	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17・18 年度研 究集録』、pp. 97- 100、4p	松戸市内の事業者の参加を得てクド バス（職業能力開発手法 CUDBAS）・ ワークショップ「わが事業所ができ ること」を実施し、その成果から、 事業所の参画を実現するための要素 を抽出した。その結果、事業者の提 出した能力カードについては、「わ が事業所」や自分自身がもつ、子ど もたちへの教育機能を提供しようと する意志が強く表れていた。これ は、事業者と親・市民との「協働」 （それぞれの立場を生かした協力） の意義とともに、「共同」（同じ立 場からの協力）の可能性を示すもの ととらえられる。
42	子育て支援インターネット・マルチメディア活用に関する研究	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17・18 年度研	インターネット、マルチメディア関 連については、子育て支援社会連携 研究の構想原案作成段階において は、次の諸点のとおり整備したいと 考えた。①地域子育て情報について は、書籍や資料のほか、マルチメ ディアも利用できるようにする。②数 台のノートパソコンを用意し、市民 や学生が個人研究もできるようにす

				究集録』、pp. 51-52、2p	る。③インターネットによるテレビ会議システムを活用した能動的な学習ができるようにする。④マルチスクリーンは4面分割投影もできるようにする。⑤無線LANにより、ノートパソコンを持ち込めばインターネットにつながるようにしておく。
43	子育て支援関連文献データベース化及び活用に関する研究	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17・18 年度研究集録』、pp. 21-24、4p	「青少年問題に関する文献データベース」により、1990 年 1 月から 2002 年 3 月までに発行された関連文献で筆者が担当したドキュメンテーション 3430 件から、「子育て支援」、「親子」を検索した結果、題名からのヒット数 10、要旨からのヒット数 56 となった。このように、「子育て支援」ヒット文献については数は少ないものの、公開された知見を継承、発展させる文献データベース活用の意義が大きいことが明らかになった。
44	クラウド活用による子育て支援社会連携研究センター事業評価に関する研究	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究高度化推進事業社会連携研究推進事業（研究代表者 松島鈞）、『連鎖的参画による子育てのまちづくりに関する開発的研究 平成 17・18 年度研究集録』、pp. 17-20、4p	本試案は次の効果が期待できる。①「必要度／達成度」から、事業計画における優先度を導き出すことができる。また、優先度の最低点 0.2（1/5）から最高点 5.0（5/1）までを 5 つに区切り、各機能を 1 から 5 までに分類することができる。②各機能について、1 と 2 を灰色系、3 を青系、4 と 5 を赤系の色で棒グラフのように塗りつぶせば、可視的に「温度差」を表すことができる。③本票の右半分をセンター職員の職能により分析すれば、適正な人員配置計画や効果的な研修計画が可能になる。

45	クドバスワークシ ョップによる子育て支援センター機能の検討	単著	平成 19 年 12 月 20 日	私立大学学術研究 高度化推進事業社 会連携研究推進事 業（研究代表者： 松島鈞）、『連鎖 的参画による子育 てのまちづくりに 関する開発的研究 平成 17・18 年度研 究集録』pp. 11- 16、6p	センター機能に関する「クドバス （職業能力開発手法 CUDBAS）チャー ト」を作成し、その成果を分析し て、求められるセンター機能の全体 像を検討した。その結果、「ネット ワーク系」の機能の得点が最大であ り、機能カードの内容から、機関間 連携でもあり、人的ネットワークで もあることがわかった。また、「商 品開発」の得点は低い、ネットワ ーク構築のなかで実現すべき機能で あると考えた。
46	「学生による子育 て支援研究」の方 法と効果－学生の 社会化支援の視点 から〔査読付〕	単著	平成 19 年 12 月 20 日	聖徳大学 FD 紀要、 『聖徳の教え育む 技法』、2 号、 pp. 53-68、16p	学生に研究をさせることによって、 他者への関心、自他への信頼感、チ ームワークなどの一定の側面におい ては、彼らの社会化のための、効果 的な気づきを促進するということに ついて確かめることができた。同時 に、研究をするということのもつ難 しさや、現実の職業の場の厳しさな ど、いくつかの阻害要因も明らかに なった。
47	現代青少年に関わ る諸問題とその支 援理念の変遷－社 会化をめぐる青少 年問題文献分析	単著	平成 19 年 3 月 31 日	、科学研究費基盤 研究（C）（課題 番号 17530588）研 究成果報告書（研 究代表者 <u>西村美東 士</u> ）、331p	キーワードに関して、文脈まで含め て細部にわたり分析した。その分析 を通して、社会化支援理念が、青少 年個人の即自、対自己、対他者、対 社会の気づきにどう対応しようとし てきたかを検討した。その結果、そ の変遷過程に一定の特徴を見いだ し、より効果的な支援方策のための 知見を得た。方法論に関しては、個 人化と社会化の統合的支援や、自己 形成と社会形成の一体化の実現に向 けた有益な知見を得た。成果公開の 内容と方法の改善については、社会 化効果の測定や、より効果的な施 策・事業展開のための計画策定の指 標について明らかにした。

48	まちづくり推進における青少年と親の社会化支援方策－佐野市生涯学習推進基本構想作成過程からの検討 〔査読付〕	単著	平成 19 年 3 月 28 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、5 号、pp. 17-37、21p	中間答申作成過程における委員の青少年育成及び子育てのまちづくりに関する発言内容を分析し、次の点が明らかになった。①「まちづくり推進」という公的課題の学習において、青少年と親の社会化不全の状況が問題視された。②「まちづくり推進」において「社会化促進要因」を活性化するための、「居場所」、「参画」、「仲間づくり」などの重要性が認識された。③「地域教育力」、「家庭教育力」などに関しては、閉塞感が強く、実効性のある現実的な支援方法までには至らなかった。
49	「出産・子育ての自己決定能力」を育む大学授業の方法と効果－女子学生（未来の母親）の社会化を支援する技法〔査読付〕	単著	平成 18 年 12 月 20 日	聖徳大学 FD 紀要、『聖徳の教え育む技法』、1 号、pp. 31-49、19p	「クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）を活用して女子学生自身の社会化欲求に対応したワークショップ型授業を行うことによって、子を産む性をもつ者として必要な社会化を効果的に促進することができる」という仮説を設定し、その授業の過程を検討した。その結果、「他者との関係や職場における自己のもつべき能力の客観的な位置づけ」、「自己内対話の促進」、「課題・目標の自己設定、共同設定」という機能の面での効果が明らかになった。
50	構造的理解に基づく子育て学習の支援のために－子育て支援学習における学生の社会的視野拡大の事例からの検討〔査読付〕	単著	平成 18 年 7 月 1 日	日本生涯教育学会、『日本生涯教育学会論集』、27 号、pp. 51-60、10p	女子学生に子育て支援に関するグループ研究による学習を行わせ、その成果と学習過程における記述に表れた気づきを分析した。その結果、「自己への主体的関わり」→「他者との交流」→「社会への主体的関わり」という発展過程が示された。このような仲間や他者との出会いや交流を契機とした社会的視野の拡大過程は、親の子育て学習と共通する。

51	学生の社会化支援の観点に立った「子育て支援」教育の研究－「連鎖的参画による子育てのまちづくり」研究の一環として〔査読付〕	単著	平成 18 年 3 月 31 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、4 号、pp. 49-62、14p	2005 年度後期、聖徳大学学部 1 年生に、親の子育て研究、親の会研究、自由課題研究を行わせ、その社会化効果を次のとおり検討した。①研究への参画により、「おもしろいから研究する」という主体的な姿勢に転換できる。②特定の目的のもとに自主的に交流することにより、ネットワーク社会における人的交流能力が育つ。③広い視野から自己の職業や生活を見るため、社会のなかでの自己の位置を客観的に認識し、それをもとに行動する力を育てる。
52	クドバスを活用した子育て学習の内容編成－高校生の子をもつ親のために－〔査読付〕	単著	平成 17 年 3 月 9 日	聖徳大学生涯学習研究所紀要、『生涯学習研究』、3 号、pp. 41-54、14p	「職業能力分析」の手法を援用することにより、高校生の子をもつ親に求められる能力を分解してとらえた上でこれを構造化し、各科目の到達目標及び全体の「仕上がり像」が明示化された学習内容を編成して、学習プログラムを作成した。その結果、学習スケジュール作成の段階にあつては、比較的容易に、テーマごとの学習目標を明確に設定することが可能であることが明らかになった。
53	都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析	共著	平成 16 年 3 月 31 日	担当部分「若者の友人関係の類型と社会化支援」、基盤研究(A)(1))(研究課題番号 13301011)、平成 13・14・15 年度科学研究費研究成果報告書、pp. 148-159、12p、研究代表者高橋勇悦	神戸・杉並の約 1000 人の若者の回答から、友人関係に対する態度を横軸に、「自分らしさ」に対する考え方を縦軸にして 4 領域を設定して検討した結果、各類型に応じた社会化支援の必要が導き出された。しかし、社会的能動／受動との関連については、上のような鮮明な有為差が出なかったことから、個人として深まり充実する「個人化」と、「社会化」との統合的支援の必要を結論づけた。

54	学生の社会化を支援する大学授業の方法論〔査読付〕	単著	平成 16 年 3 月 31 日	徳島大学、大学教育研究ジャーナル、1 号、pp. 1-19、19p	1 授業における双方向要素の効果、2 社会からの青少年の社会に関する要請の近年の動向に関する年次ごとの文献分析及び大学教育の対応、3 社会化に関する学生の記述内容の分析と、「自分らしさ」に関する意識との関連による類型化。以上の検討のち、質問紙調査の結果から、学生の社会化類型に応じた望ましい大学授業の方法に関する仮説を検討した。
55	学習ニーズの動向とプログラム提供のあり方〔査読付〕	単著	平成 15 年 7 月 31 日	徳島大学大学開放実践センター、『徳島大学大学開放実践センター紀要』、14 巻、pp. 29-38、10p	調査結果から、受講者は第 1 に、自己の研究や学習の中で、自己に閉塞するだけでなく、他方でしなやかなネットワークを求めていること、第 2 に、社会とつながることを求めていること、第 3 に、他者や社会に役立ちたいと思っていることが明らかになった。
56	最近の若者の労働観と生き方を考えるー日本産業教育学会第 43 回大会ラウンドテーブル報告	単著	平成 15 年 1 月 31 日	日本産業教育学会、『産業教育学研究』、33 巻 1 号、pp. 20-25、6p	3 人の登壇者は「定職に就く」ことを絶対視する考え方に異議を申し立て、「やりたいこと」を求めて生きていくことを大切にしたい。その議論を通して「主体的フリーター」の存在が浮かび上がってきた。今後の産業教育は、「主体的フリーター」をも包含したところに「望ましい到達像」を設定する必要がある。
57	青少年施策の進展に対応する施設経営の動向ー90年代の関連文献の分析から〔査読付〕	単著	平成 14 年 9 月 30 日	日本生涯教育学会、『日本生涯教育学会論集』、23 号、pp. 85-92、8p	青少年教育施設に関する 90 年代の文献を分析した。その結果、①受け身の自己都合の発想からの脱却、②公立施設の施策との相互疎外の解消、③国立施設の先導性の保持、④実践・研究の充実とその成果の開示・流通の必要を提起した。

58	青少年施設の居場所機能－90年代の青少年問題関連文献の分析から〔査読付〕	単著	平成14年6月30日	徳島大学大学開放実践センター、 『徳島大学大学開放実践センター紀要』、13巻、 pp. 73-81、8p	440件の文献のうち、要旨に「居場所」という語を含む文献数は8件(1.8%)であった。全文献では43件(1.7%)であり、比率はさほど変わらなかった。8件のうち6件が公立施設に関わるものであり、「公立優位」といえる。「国際」に関する文献の分析からも、それが日常的に行われることによって、わが国やアジア、他国の青少年にとって青少年施設が「居場所」になりうるのだと考えられる。
59	チャット及び電子掲示板システムを導入した学生間交流授業の実践	共著	平成14年3月31日	科学研究費特定領域「衛星利用の遠隔授業・日本語教育と社会人教育の効率化に関する基礎的研究」報告書、pp. 15-17、3p、光田基朗他	今回の授業では、コンピュータを介して匿名性を保障されても、コミュニケーションの苦手意識自体が解消されるわけではないことが示された。他方で、「内面性」「社会性」に関わる話題の展開に関しては、一定の側面からはコンピュータの導入の効果があつた。教師は、この効果をよりいっそう意識的に活かすことによって、共感や信頼能力を培うことができる。
60	親子関係における気づき過程とその支援－公開講座による子育て支援の実践〔査読付〕	単著	平成13年6月30日	徳島大学大学開放実践センター、 『徳島大学大学開放実践センター紀要』、12巻、 pp. 71-95、25p	講師がいくつかのワークショップの手法を活用することにより、同じ悩みを抱えた学習者のなかでは、受容的雰囲気は比較的容易に形成されることがわかった。しかし、本研究では同時に、「わかる」とか「同じ」などの受容をシェアすることによって、逆に対自や対家族、対社会への気づきを阻害してしまう傾向を見出した。
61	ワークショップ型授業の構成要素とその効果－学生の自己決定能力を高	単著	平成12年11月10日	大学教育学会、 『大学教育学会誌』、22巻2号、 pp. 194-202、9p	2日間の「生涯学習概論」の授業で、学生がどのように自己や他者に対する気づきを得たのか、その変容の過程を解明することによって、学生の自己決定能力を高める授業の構成要

	める授業方法〔査読付〕				素とその効果を明らかにした。第1に、ワークショップ型授業によって、即自から対自へ、対自から対他者へと学生の気づきが促され、対他者から再び対自や即自のより深い気づきへと循環する過程が明らかになった。第2は、学生の自己決定能力の到達段階の把握に基づく戦略的な指導内容と授業構成の必要性が明らかになった。
62	S C Sを活用した遠隔教育のあり方ー徳島大学大学開放実践センターでの試みからー〔査読付〕	単著	平成12年9月30日	日本生涯教育学会、『日本生涯教育学会論集』、21号、pp.21-27、7p	1本事業の概要、2本事業の成果と課題、3来年度事業の方向、4遠隔教育のワークショップ化の提唱ーピア(同質の仲間)ではなく、異なる他者との臨床的真実の出会いをめざして、5結語(「協働」の遠隔教育によって我々が得るものは、究極的には、相手の「個の深み」との出会いということができる)。
63	1990年代青少年教育施策と理論の文献分析ー10年間の青少年問題文献ドキュメンテーションからー〔査読付〕	単著	平成12年6月30日	徳島大学大学開放実践センター、『徳島大学大学開放実践センター紀要』、11巻、pp.27-52、26p	1990年代の青少年教育施策理念を関連文献の分析から次のとおり把握した。1初頭の動きとしての臨教審／個性重視／生涯学習、2大人の個が問われる学校週5日制／「心を育てる」、3個別に多義的に生きる個ー自由時間再評価／自分さがし、4固有の身体をもった個ー臨床の知／体験学習と冒険教育／生きる力、5他者との関係のなかで生きる個ー癒し／居場所／準拠個人／第4の生活の場、6共同体のなかで生きる個ー団体活動／学社融合／第4の領域、7他者から承認されて生きる個ーカウンセリングマインド／自己決定、8貢献することによって生きる個。以上から大学開放にとっての意味を論じた。

64	癒しの大学開放－ 徳島大学大学開放 実践センター公開 講座「私らしさの ワークショップ」 報告〔査読付〕	単著	平成 11 年 6 月 30 日	徳島大学大学開放 実践センター、 『徳島大学大学開 放実践センター紀 要』、10 巻、 pp. 87-112、26p	1 自己中心主義の評価、2 他人に関心 を寄せるようになることの意義、3 他 者の幸せを感じる時への共感の誘 発、4 自己の価値観への気づき、5 「あげる」と「もらう」だけの相互 協力の意義、6「裏講座」における多 角的交流の意義、7 自分の気持ちを相 手に伝える能力の育成、8 わかってもら う、わかってあげようとするこ の意義、9 社会に役立つわたしという 存在確認。
65	社会教育関係者に よっての電子メー ルの存在価値－自 負できるプライバシー、二次利用され たい著作権の誕生	単著	平成 9 年 3 月 31 日	財団法人 A V C C、平成 8 年度文 部省補助事業生涯 学習関連施設調査 研究報告書、 pp. 94-97、4p、財 団法人 A V C C 調 査研究アドバイザー 委員会編	1 N 対 N のコミュニケーションの「道 具」としての電子メール、2 社会教育 職員のメールリストの活用、3 水 平異質共生の出会いによる気づきと 癒しの仮想的コミュニティ、4 自負で きるプライバシー、二次利用されたい 著作権。
66	個の深みを支援す る新しい社会教育 の理念と技術(そ の 7)〔査読付〕	単著	平成 9 年 3 月 15 日	昭和音楽大学、 『昭和音楽大学研 究紀要』、16 号、 pp. 43-58、16p	授業による学生の気づきの記述内容 から次の特徴と課題を抽出した。1 防 衛的態度に追い込む家族関係の病 理、2 奴隷の覚悟と自己決定、3「防 衛→批判→主体性獲得」の双方向教 育。
67	青少年育成地域活 動をめざして(ま とめ)	単著	平成 8 年 6 月 1 日	神奈川県青少年総 合研修センター、 『神奈川県青少年 関係調査研究報告 書』、18 号、 pp. 84-94、11p	1 自然体の育成活動を、2 地域と人間 の真実に出会う、3 対象から主体へ、 対策よりも支援を、4 不幸な現代社 会と大人たち、5 フツウの大人たちも 幸せになれる育成活動、6 フツウだか らこそ、ワガママだからこそ、自 立の地域活動。

68	個の深みを支援する新しい社会教育の理念と技術(その6)〔査読付〕	単著	平成8年3月15日	昭和音楽大学、 『昭和音楽大学研究紀要』、15号、 pp.127-145、19p	授業による学生の気づきの記述内容から次の特徴と課題を抽出した。1 積極的消極のうえでの積極的積極、2 若者の巣立ちの場としての地域を地域自身が受容できるか、3 自己受容と自己変容、4 自罰のデリケートと他罰のデリケート、5 援助者としての責任と無責任、大学生が学ぶ理由。
69	科学研究費総合研究A『都市と世代文化に関する実証的研究』研究成果報告書	共著	平成7年3月31日	青少年研究会、 pp.151-170、20p、 藤村正之編、「若者にとってのネットワーク形成の困難と可能性」	神戸・杉並の青年意識調査の結果分析から次の結論を導き出した。1 知的主体性や自立的価値の要請、2 親密・淡白・親友不在の3つの突出グループ、3 交友関係における「個別性」、4 親密型の杉並、淡白型の神戸、5 一人暮らしによる交友関係の親密化、6 スポーツ系の親密、文化系の淡白、無所属の親友不在、7 親密の道具としてのダイヤルQ2、8 他者や社会を否定する「親友不在型」の不満、9 与えられた現実自らに埋没する「淡白型」のリアルな孤独、10 他者や社会の目に追い回される「親密型」の過剰適応コミュニケーション。
70	個の深みを支援する新しい社会教育の理念と技術(その5)〔査読付〕	単著	平成7年3月15日	昭和音楽大学、 『昭和音楽大学研究紀要』、14号、 pp.101-115、15p	授業による学生の気づきの記述内容から次の特徴と課題を抽出した。1 「進路」という社会の事実と真実、2 真実追求の辛さはどこにあるか、3 自由の辛さはどこにあるか、4 知的水平空間における感情表出と「求め学ぶ」学習態度。
71	個の深みを支援する新しい社会教育の理念と技術(その4)〔査読付〕	単著	平成6年3月15日	昭和音楽大学、 『昭和音楽大学研究紀要』、13号、 pp.59-76、18p	知的水平空間においては、自らの意志を曲げてまで、実体のあいまいな「社会のモラル」というプレッシャーに順応して同質化や同一化をする必要はない。むしろ、たがいが異質だからこそ、その異質の交流によって、それぞれが変わり続けること、成長し続けることができる。

72	科学研究費A報告書「生涯学習時代における文化映像の製作・保管・活用に関する調査研究」	共著	平成5年3月31日	担当部分「生涯学習の現段階からみた映像活用の課題」、文化映像研究会、pp.60-68、9p、島田外志夫他、	1 生涯学習の振興を促す国立映像センターの役割、2 生涯学習振興法と映像基本法の制定、3 生涯学習情報提供事業から見た文化映像の分類・整理の方法、4 生涯学習時代における大学のあり方と国立映像大学、5 映像が生涯学習に与えてくれるもの。
73	勤労青少年野社会参加に関する調査研究	共著	平成5年3月31日	担当部分「青少年の社会参加に関する最近の行政発行資料等の動向」、勤労者リフレッシュ事業振興財団、労働省委託事業 pp.112-119、8p、坂口順治編	毎年発行されている『青少年問題に関する文献集』（総務庁青少年対策本部）作成のために、全国の自治体や関係団体などから1990年4月から1992年3月までの2年間の間に発行された文献を調査し、概要を報告した。
74	生涯学習の生態学	共著	平成5年3月31日	担当部分「学習内容・方法の特徴的な事例」、野間教育研究所、野間教育研究所紀要、37号、pp.19-23、5p、倉内史郎他	1 学習の目標、成果、態度などの高度化、2 メディアの有効活用とメディアからの自立、3 余暇自体の質的な高度化、4 女性の生涯学習のインパクト、5 自分自身のころへの関心、6 自分と社会の新しい関係、7 集団学習の新たな展開。
75	個の深みを支援する新しい社会教育の理念と技術(その3)〔査読付〕	単著	平成5年3月15日	昭和音楽大学、『昭和音楽大学研究紀要』、12号、pp.49-65、17p	授業による学生の気づきの記述内容から次の特徴と課題を抽出した。授業が勝負であること、学生の非主体的学習態度への教師のエンカウンター、教師や他人の自信を不快に思う敗北主義の問題点。
76	個の深みを支援する新しい社会教育の理念と技術(その2)〔査読付〕	単著	平成4年3月15日	昭和音楽大学、『昭和音楽大学研究紀要』、11号、pp.67-84、18p	授業による学生の気づきの記述内容を分析し、次の特徴と課題を抽出した。学生から教師へのストローク、教師から学生へのストロークの反映、授業中の自己の体験の客観視、自己表現の不器用さと表現の解放、学校教育への怨恨、学習に対する強迫観念的な態度、集団への帰属に対する拒否感、自分の過去や他人への気づき、自分自身への気づき。

77	生涯学習時代における文化映像の製作・保管・活用に関する調査研究	共著	平成3年3月31日	担当部分「学習(文化)情報提供における映像活用の課題」、文化映像研究会、科学研究費総合研究A中間報告、pp.47-48、2p、島田外志夫他	「文化」の観点に立ち戻って考えてみても、「文化」をリアルに伝達するための一つの「手段」としての「映像」のもつメリットは、無視しえないわけであるから、「文化」を含む学習情報の提供に映像を有効活用することは、今後の重要な課題になると指摘した。
78	個の深みを支援する新しい社会教育の理念と技術(その1)〔査読付〕	単著	平成3年3月15日	昭和音楽大学、『昭和音楽大学研究紀要』、10号、pp.135-150、16p	「講義型学習と社会教育、高等教育」については社会教育のアナロジーとしての高等教育、講義からの「逃避」に隠された弱点―多数者の主体性の支援からさらに「個の深み」の支援への発展、「個の深みを支援する講義技術」については、反応・発展の個別化の促進方法、書くことの意義と実際について論じた。

IVその他

著書, 学術論文等の名称		単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学会発表)					
1	中高生の居場所の条件と新しい支援－第3の支援を考える	単著	平成30年9月15日	日本子育て学会『第10回大会発表論文集』10巻、pp. 20	中高生の居場所の原点は何か。第1は「学校や家庭が本来やってほしいことだが満たされていない」ことである。第2は、「仲間が機能するのだが、満たされていない」ことである。ここで、私は、第1の社会化支援（社会の一員としての充実）、第2の個人化支援（個人としての充実）に加えて、「第3の支援」を提唱したい。それは、「未来の充実」に向けた発達ではなく、「いまの充実」をめざすものである。
2	社会開放型子育て観への転換	単独	平成25年8月28日	日本子育て学会大会発表	子育てのまちづくりにおいては、子育て条件の整備とともに、子育て学習による次のような子育て観の転換が求められている。個人完結型「母親（もしくは父母）が自己の子育てに関する問題を（自らの範囲内で）解決するスタイル」から社会開放型「地域社会の支援・協働のもとに母親（もしくは父母）が自己及び他者の子育てに関する問題を解決するスタイル」への子育て観の転換。
3	親の社会化・個人化・原点回帰の一体的プロセスモデルの設定	単独	平成23年10月22日	日本子育て学会大会発表	子育てや関連する活動のもつ癒し効果による個人の「原点回帰」を、「自己超越」のようなレアケースとしてではなく、「普遍的成長プロセス」の一環としてとらえる必要がある。そして、親個人に「与える」だけの子育て支援では、主体的な子育ては育たない。しかし、親としての自覚や社会性をむやみに求めても、その支援は成功しない。一人一人の親が社会の形成者の一員として成長

					するとともに、個人としての自己の原点を守り、充実するという側面を一体的に認識する必要がある。
4	生涯学習の人的交流がもつ癒し効果の可能性に関する検討	単独	平成 22 年 11 月 27 日	日本生涯教育学会研究大会発表	これまで、一般に、個性の伸長や社会性の涵養など、「進展＝促進」が自明の前提として論じられてきた。しかし、人々の「癒し」へのニーズの高まり、「居場所」の再認識などの動向からは、「進展＝促進」ではなく、「進展＋回帰＝促進」ととらえる方が妥当な見解のように思える。同様の方向性をもつ知見としては、道教の唱える「無為自然」、マズローが晩年に提唱した「自己超越」などが挙げられるが、学習がもつ癒し効果による個人の「原点回帰」を、より普遍的なプロセスの一環としてとらえる必要がある。
5	社会開放型子育て観研究の展望 一親の個人化と社会化に関する 一体的アプローチをめざして	単独	平成 22 年 10 月 17 日	日本子育て学会大会発表	本研究では、次のとおり「操作的定義」を定めた。①個人完結型＝母親（もしくは父母）が自己の子育てに関する問題を（自らの範囲内で）解決するスタイル。②社会開放型＝地域社会の支援・協働のもとに母親（もしくは父母）が自己及び他者の子育てに関する問題を解決するスタイル。社会開放型子育て観の観点からの質的評価を組み込んだ数量化と、気づきの過程やレベルアップに関する動態的理解により、どのようなプロセスをたどらせることによって、両者を統合した子育て観を育てることができるか検討した。
6	子育て支援学の学的体系の構築 一聖徳大学「連鎖的参画による 子育てのまちづ	単独	平成 21 年 11 月 8 日	日本子育て学会大会発表	子育て支援学の学的体系の構築により、第一に、子育てを実践する関係者に有益な情報をもたらす実学としての学問構築が期待できる。第二に、大学教育等における子育て支援

	くり」研究成果から				者の養成における体系的カリキュラムの構築が期待できる。第三に、学的体系が確立してくると、当然、研究関心が広域化、細分化、専門分化してくる。このことは従来型研究スキームを超えた形態を求める。それは親、未来の親としての学生、子育て支援者の研究参画が、当然の帰結として現れることを意味する。
7	子育てまちづくり参画促進による大規模小売店及び地場産業の振興に関する研究	単独	平成 20 年 11 月 8 日	日本生涯教育学会、第 29 回大会自由研究発表	これまでの子育て支援学関連領域の研究においては、「まち・産業の社会形成」と「子育て及び子育て学習による自己形成」のいずれかのアプローチから結果を見ようとしてきたため、一面しか見るができなかった。「社会開放型子育て観」をキー概念とする一体的アプローチにおける諸要素の詳細に関する検討が、これまでの研究領域を拡大させ、研究成果を発展させる。
8	子育て学習の構造的理解と支援ー「子育てのまちづくり」検討のための仮説の設定	単独	平成 17 年 10 月 29 日	日本生涯教育学会、第 26 回大会自由研究発表	育て学習支援者は、親の気づきをより構造的に理解し、サロン型学習がより気づきを深めるワークショップ型学習に発展、深化するよう、効果的な指導行為を介在させる必要がある。そこで、親の気づき過程や、親能力の構造的把握の方法について検討し、クドバス（職業能力開発手法 CUDBAS）の効果的活用のためには、「自信の獲得に関する自己評価」「統合的能力を育成するプログラム」が有効であるという仮説を提起した。
9	日本の生涯学習フェスティバルの現状と課題	単独	平成 17 年 9 月 23 日	韓国平成教育連合会、研究者大会発表	日韓の参加者層として高齢者への偏りが見られる。両国の少子化ダメージを縮小することに貢献するよう生涯学習フェスティバルを運営するためには、「聖徳大学子育て支援社会

					連携研究」における子育て支援や青年の社会参加促進の視点が求められよう。日本では、国の支援のもとに全国フェスティバルが開催された後、その地域のフェスティバルが独自に開催される事例が多い。国は、このような傾向を助長するよう配慮する必要がある。
10	青少年文献分析の意義と枠組－現代青少年の社会化支援の視点から	単独	平成 17 年 9 月 17 日	青少年育成学会、第 6 回研究集会発表	科研費（研究成果公開促進費）「青少年問題に関する文献データベース」の研究成果、2005 年度からの科研費「現代青少年に関わる諸問題とその支援理念の変遷－社会化をめぐる青少年問題文献分析」（基盤研究 C）の研究経過、自らのワークショップ型授業の研究で得た知見をもとに、社会化支援の視点からの青少年文献の分析枠組を提起した。
11	青少年施設における社会化言説と今後の課題－青少年文献データベースを活用した調査研究	単独	平成 15 年 11 月 30 日	日本生涯教育学会、第 24 回大会自由研究発表	1 個性化と社会化に関わる青少年文献の量的動向、2 わが国の青少年施策における社会化言説、3 青少年援助としての社会化機能、4 教育における「個人化」機能、5 社会化願望と社会化圧力とのミスマッチ、6 今後の社会に求められる社会化言説の課題。
12	青少年文献データベース構築に向けた構想と課題－青少年教育研究の視点から	単独	平成 14 年 11 月 17 日	日本生涯教育学会、第 23 回大会自由研究発表	関連文献データを全体的に把握し、それを電子化することによって、活用範囲が飛躍的に広がるのが期待できる。そのことによって、次の 3 点の解明に役立てることができよう。(1) 青少年問題の動向に対する従来の施策立案の問題点。(2) 打ち出された施策と、その実践としての教育プログラムや研究成果との関連。(3) 今日の青少年問題に真に対応できる施策及び教育プログラムのあり方。

13	大学授業における学生の社会化過程の類型－個人化と社会化の相互関係に着目して	単独	平成 14 年 7 月 13 日	大学教育学会、第 24 回大会自由研究発表	「自分らしさを守り育てることと、社会性を身につけることはどういう関係にあるか」について学生 54 人の文章表現を集約し、Ⅰ主観的自分らしさ優先型、Ⅱ自己抑圧としての社会化型、Ⅲ自分らしさの基盤としての社会化型、Ⅳ社会化・自分らしさ相互好循環型に整理した。それぞれの類型において、個人化がより深く実現される社会化を効果的に支援する方策を検討しなければならない。
14	癒される情報処理教育	単独	平成 11 年 11 月 13 日	平成 11 年度情報処理教育研究集会発表	1 癒しとは何か、2 自己決定の支援方法、3 効率偏重からの脱却方法、4 大学公開講座「私らしさのワークショップ」自己評価、4 看護学校授業「情報科学」自己評価、5 状況主義的自分らしさを許容するコミュニケーション教育のあり方、6 教師から学生への「介在」のあり方。
15	インターネット・SCSを活用した遠隔教育のあり方	単独	平成 11 年 10 月 9 日	日本生涯教育学会、第 20 回大会自由研究発表	1 センター(部内)情報収集・提供計画、2 「私らしさのワークショップ」におけるインターネット活用、3 公開講座を SCS で配信、4 遠隔教育のワークショップ化の提唱－異なる他者との臨床的現実の出会い。
16	癒しの大学開放－「私らしさのワークショップ」から	単独	平成 11 年 9 月 11 日	日本社会教育学会、第 46 回研究大会自由研究発表	1 「私らしさ」のパラドックス、2 「後向き」の肯定、3 自己決定活動の傷と癒し、4 技術屋としての大学への期待、5 裏講座・フリースペースの存在意義、6 活動している人の大学開放への期待、7 アカデミズムとしてのリベラルアーツ、8 臨床的現実との出会い。
17	生涯学習とは何か	単独	平成 7 年 11 月 17 日	日本生涯教育学会、第 16 回大会研究発表	1 「発達だけでなく癒しも」、2 若者の巣立ちの場としての地域を地域自身が受容できるか、3 「積極的積極性ととともに積極的消極性を」

18	パソコン通信の 双方向性と相互 教育力	単独	昭和 62 年 11 月 14 日	日本生涯教育学 会、第 8 回大会課 題研究発表	1 新しい学習集団の形成 2 パソコン通 信における相互学習の基盤 3 パソコ ン通信の知的ツールとしての特性 4 パソコン通信が与える知的試練 5 「知」に関する論議の実際の例 6 相 互学習援助の視点から見たパソコン 通信の課題 7 パソコン通信における 地域性と広域性の関係。
(書評)					
1	書評東京大学大 学経営・政策コ ース(編集)『大 学経営・政策入 門』2018 年 9 月 11 日	単著	平成 31 年 2 月 25 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1512 号、pp. 34-34	評者は考える。すでに多くの関連図書 が発行され、大学側の表面的な PR に 惑わされず、新卒時ではなく卒業 3 年 後の就職状況や、ワークショップ型の 教育改善活動が生き生きと行われてる かなどを知ろうとする生徒や親が増え ている。このような状況において、大 学の大衆化を否定する根拠のない物言 いに惑わされず、さらに、3つのポリ シーに基づく教育課程の体系化にかけ た本気度、現実性を推し測るような判 断力がわれわれの進学指導に求められ ているのだと考えたい。それは、生徒 や親のレベルアップしたニーズをさら に上回る確かな専門性といえよう。
2	書評安藤寿康 『なぜヒトは学 ぶのか』2018 年 9 月 19 日	単著	平成 31 年 1 月 28 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1508 号、pp. 34-34	評者は考える。われわれも、親や子の 表層的ニーズに振り回され、学業成績 だけに追い回されがちである。しか し、本当の教育の目的は、人格の完成 とともに、利他的行動や社会形成のた めの能力を育成することにある。学校 教育の視野を、学校外教育等の横にも 広げ、生徒の卒業後の充実等の縦にも 広げて、生涯学習社会の中での学校独 自の役割を再確認すべきではないか。

3	書評樺沢紫苑 『学びを結果に変えるアウトプット大全』2018年8月3日	単著	平成30年12月17日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1504号、pp.34-34	教育においても、充電だけでなく、放電が重視されるようになった。だが、評者は、最近騒がれている「社会で役立つコミュニケーション力」と、この本が言う「自己成長に役立つアウトプット」との間に、微妙な差異を感じる。前者は、競争社会の生き残り手段、後者は相互関与による「学び合い支え合い」を表していると言ったらい過ぎだろうか。前者の「コミュ力圧力」によって、若者がすりこぎのように自らをすり減らしているような気がする。教育においては、楽しい充電につながるような楽しい放電を追求したいものだ。
4	書評事業構想大学院大学出版部編『SDGsの基礎』2018年9月3日	単著	平成30年11月19日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1500号、pp.34-34	評者は、就職や起業において、自らの職業が、人類や地球の存続にも貢献するという夢のある職業観を持てる若者は、一部のエリートに限られてしまうのではないかと危惧する。格差の拡大と不正の横行のなか、多くの若者は、仕事に夢を持てずにいるように思える。われわれの教育活動においては、若者が自らの存在の社会的意義を確認し、「社会的視野の拡大と自己の位置決め」に基づいて自己決定ができるよう支援するものでありたい。
5	書評池上彰『知の越境法－「質問力」を磨く』2018/6/13	単著	平成30年10月15日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1496号、pp.34-34	評者は、同書の言う「質問力」について、インタビューによる暗黙知可視化手法との共通点を多く見出す。池上氏の言う「一見役に立たないと思うこと」でも疑問を持つことで知識が広がる。これはすぐに陳腐化する「すぐに役立つもの」と対照的だ。そして、狙いは定めておくものの、そこで発生する偶然の果実は取りこぼさないという「ゆるやかな演繹法」が、インタビューのポイントになる。教育も、このような既定の解答のないことを追求する

					「質問力」を生徒に身につけさせることが重要と言えよう。
6	書評見田宗介 『現代社会はどこに向かうかー 高原の見晴らしを切り開くこ と』2018/6/21	単著	平成30年9 月17日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1492 号、pp.34-34	同書は「一つの細胞がまず充実する と、他の一つずつの細胞が触発されて 充実する」として、最後に「今ここに 一つの花が開く時、すでに世界は新しい 」と謳い上げる。評者は考える。教育 は価値創造の活動である。研究者が 細分化された検証可能な知見だけを提 供してくれても、それだけでは足りない ことが多い。教育の現場で試行錯誤 して「新しい世界」にチャレンジする 必要に迫られる。このようなとき、80 歳を超えた学者の思い切った「大きな 見解」の提起は、教育に携わる者にと って勇気づけられる。
7	書評 NHK スペシ ャル取材班『高 校生ワーキング プア～「見えな い貧困」の真 実』2018年2月 16日	単著	平成30年8 月20日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1488 号、pp.34-34	同書は、定期試験期間中でもシフトを 入れられてしまう「ブラックバイト」 に対して、「自分がいないと店がまわ らない」と考え、断れない責任感のあ るまじめな生徒の例を挙げる。たしか に、学習意欲が高い生徒に対しては、 解決してやりたい。だが、学習意欲が わからないまま、定期試験のみに追い回 される生徒に対しては、より本質的な 支援が必要と評者は考える。彼らが社 会に出てから、個人として、社会人として、 充実して生きていけるかどうか こそ重要であろう。彼らには、試験勉強 にあくせくさせることよりも、他者と 相互受容できる関係を持ったり、社 会的な広い視野からものを見たり、考 えたりできるような力を育むことこ

					そ、本質的な教育目的とすべきではないだろうか。
8	書評萩原建次郎 『居場所～生の回復と充溢のトポス』2018年3月9日	単著	平成30年7月9日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1484号、pp.34-34	評者は、多くの若者が「リア充」を志向し、「実存的な悩み」から「すり抜けて」しまっているように感じる。だが、彼らのリア充志向は「共存の作法」としては有効であっても、「生の回復と充溢」にはつながらない。このとき、学校に通っている子どもたちに対しては、居場所の一つとしての学校の役割は大きい。そこには、個人としてか、社会人としてかを超えて、充実して今を生きるプロセスをたどるための「第3の支援」が存在すると思う。話を聞いてくれる、肩を押してくれるなどの個に対応した居場所的な支援がどのように行われているか。そこには、意図と操作を保留して見守り、状況に対応する教師の「現場力」があるはずである。これを評価し、交流・蓄積することが求められているといえよう。
9	書評日本青年心理学会企画『君の悩みに答えようー青年心理学者と考える10代・20代のための生きるヒント』2017年12月2日	単著	平成30年6月11日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1480号、pp.34-34	「若者よ、おおいに悩むべし！」という同書のメッセージは、一部の「悩める若者」を除いた一般的な若者にどう受け止められるのだろうか。今日の時代においては、中教審が指摘した「自分探しの旅」について疑問視する「現実主義」からの批判も強い。そういうなかにあっても、教育は、今日の課題に対応したかたちでの若者の自我の確立の支援という役割を放棄することはできない。教育現場で個人に応じた解を積み上げる必要があると評者は考える。

10	書評溝上慎一 『アクティブラーニング型授業の基本形と生徒の身体性』2018年3月1日	単著	平成30年5月7日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1476号、pp.34-34	A L 改革の喫緊の課題は、「一方通行的な知識伝達型としての講義型を講義＋A L 型授業に転換すること」であり、そのことによって、主体的学習は、面白さなどの即自的な「課題依存型」から「自己調整型」、そして自身を認知する対自的な「人生型」へと深まると筆者は言う。評者は考える。学校からのトランジション後の生涯の充実を目指すとともに、二、三十年後の社会に向けた価値をともに創り出す、そこにこそ改革とA L の神髄と楽しさがあると言えよう。
11	書評新井紀子 『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』2018年2月2日	単著	平成30年4月2日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1472号、pp.34-34	超有名私立中高一貫校は、12歳の段階で高校3年程度の読解力のある生徒を入試でふるいにかける。そのため、教科書や問題集を「読めばわかる」のだから1年間受験勉強にいそしめば旧帝大クラスに入学できてしまうと言うのだ。同時に、12歳以降でも、スマホの使用時間などとはほとんど関係なく、読解力の向上はできると氏は言う。評者は考える。多くの若者が、読解力不足のために「楽習」を味わえない状態が続くならば、これは深刻な格差であり、社会問題と言うべきである。
12	書評藤井青銅 『日本の伝統の正体』2017年11月23日	単著	平成30年3月5日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1468号、pp.34-34	評者は考える。教育では、不確かな情報を排除することが大切である。だが、以上のような「伝統」や「モラル」に関することは、思い込みで語られたまま流通してしまうことが多いように思う。正確な年号はわからないとしても、時系列に関する大きな勘違いは、なんとか解消したいものである。

13	書評河野真太郎 『戦う姫、働く少女』2017年7月20日	単著	平成30年2月5日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1464号、pp.34-34	評者は考える。ポップカルチャーのおかげもあってか、幸福感が強い個人完結型の女子が増えている。彼女たちに過去のフェミニズムを押しつけることもあるまい。だが、社会に出て「解放されていないこと」に気づくのでは気の毒だ。ポップな楽しみをもちつつも、労働と生活をリアルに選択する力を育てる必要がある。
14	書評野矢茂樹 『大人のための国語ゼミ』2017年8月1日	単著	平成29年12月25日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1460号、pp.34-34	氏の主張する「普段着の文章志向」は、大人だけでなく、現代文の授業になじめない多くの若者にとってもなじみやすいのではないか。氏の言うように「まずは学ぶべきことのポイントが明確で、よけいな要素があまり入っていない文章、実用性の高い文章で練習」することが国語を学ぶ楽しさにつながるのだと感じる。また、氏は、分かりあうことなどできないとか、考えは人それぞれとかいうことを認めた上で、言葉の力の支えによって分かりあおうとするよう提唱する。つながり志向を持ちつつ、個人化社会を生きなければならない今の若者の心に、その言葉はすんなり入っていくのだと思う。学校教育の国語も、成人教育と同様、有用かつ楽しいものでありたい。
15	書評小林美智子 『帰宅恐怖症』2017年6月20日	単著	平成29年11月27日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1456号、pp.34-34	評者は次のように考える。「善い」目的、形式知と暗黙知の相互変換など、教育が目指すべき価値としても重視すべき提案だろう。だが、異なる価値観をもつメンバーが共存する組織・集団で目的を共有し、実現させるリーダーとしての意欲や能力はどう養えばよいのか。「管理職になりたくない」という若者や壮年が増えているなかで、今の若者のモデルたりうるリーダーの暗黙知の臨床的な追究が、若者との「横と縦の関係」による価値創造につながるに違いない。

16	書評野中郁次郎 西原文乃 著 『イノベーションを起こす組織ー革新的サービス成功の本質』 2017年7月31日	単著	平成29年10月23日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1452号、pp.34-34	評者は次のように考える。「善い」目的、形式知と暗黙知の相互変換など、教育が目指すべき価値としても重視すべき提案だろう。だが、異なる価値観をもつメンバーが共存する組織・集団で目的を共有し、実現させるリーダーとしての意欲や能力はどう養えばよいのか。「管理職になりたくない」という若者や壮年が増えているなかで、今の若者のモデルたりうるリーダーの暗黙知の臨床的な追究が、若者との「横と縦の関係」による価値創造につながるに違いない。
17	書評泉谷閑示 『仕事なんか生きがいにするなー生きる意味を再び考える』 2017/1/28	単著	平成29年9月25日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1448号、pp.34-34	氏は、イソップ物語のアリとキリギリスの例を示す。わが国では、サブカルチャーにおいては世界をリードする勢いを持っているが、カルチャーそのものについては十分ではないとし、キリギリスのような、懂れるに耐える文化を生み出すことが、現代の虚無に押し潰されないために求められていると言う。評者は考える。生きにくさを感じながらも「実存的問い」や正統派の文化を追い求めるタイプの子どもたちに対しては、キリギリスのような「今」の充実のための支援を検討する必要がある。
18	書評吉光正絵・池田大臣・西原麻里編著『ポスト〈カワイイ〉の文化社会学ー女子たちの「新たな楽しみ」を探るー』 2017/4/20	単著	平成29年5月15日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1444号、pp.34-34	永田夏来氏は、量的調査の結果から、「夏フェス女子」は、幼少期に美術館・博物館訪問やクラシック視聴を経験した者が有意に多いと言う。そして、このような「文化資本の高い女性」が、「夏フェス」での写真写りの良さと「かわいい」をネットで発信しているという。以上を、吉光氏は、「心躍る楽しみ」と表現している。評者は考える。人には個人や社会人としての成長とは別に、そのこと自体が癒しや「心躍る楽しみ」になる時間が大切だ。それが社会における新しい価

					値や文化の創造につながる。しかし、そこに格差があるとすれば、教育は、貧困な子どもに対して、文化資本提供の手を差し伸べることも考えたい。
19	書評長野雅弘著 『いじめからは夢をもって逃げましょう！－「逃げる」は、恥ずかしくない「最高の戦略」－』2017/5/14	単著	平成 29 年 7 月 17 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1440号、pp. 34-34	評者は考える。このようなある意味「いじめ」が大いにありうる学校教育において、「いじめなどない」と強弁するのは無茶な話だ。それによって、氏が指摘するように小さいいじめが摘み取られずに、重大事態に陥っていく。そして、いざことが起こると、建前的な効果のない対応が繰り返される。努力や頑張りが無駄に積み重ねられるのだ。この傾向は、今の子どもたちにも感じられる。現実社会では、自己の充実にとって有益、社会的に有用というような「効果」が問われるのに、学校では、主観的な「頑張り」が偏重される。意味のない頑張りはやめて、いじめ解消のための転校も含め、自由になって実効性のある対策をとることによって、「楽しくなければ学校じゃない」という「学校の姿」を取り戻せるのかもしれない。

20	書評北田暁大、 解体研編著『社会にとって趣味 とはなにかー文化社会学の方法 規準ー』 2017/3/25	単著	平成 29 年 6 月 19 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1436 号、pp. 34-34	評者は考える。たしかに、オタク、サブカルなどの趣味は、他者との差別化だけでなく、逆に紐帯としても機能している。実際、クラブ通いの友人を得た地方出身の若者の東京定着率が高いなどの効果が他の調査で明らかにされている。だが、教育においては、そのような連帯志向だけでなく、自己の確立（階級的な差別化とは異なる）という「個人化」と、「異質な他者との交流と共有」という「社会化」を追求する必要がある。そのとき、オタク、サブカルを含めた生徒たちの趣味を尊重しつつ、それが望ましい個人化と社会化の契機になるよう働きかけ、新しい価値の創造をめざしたいものである。
21	書評小谷敏編 『二十一世紀の 若者論ーあいまいな不安を生きる』 2017/2/25	単著	平成 29 年 5 月 15 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1432 号、pp. 34-34	評者は考える。教育は、生徒の自己決定能力を育成しようとする。そのとき、自己決定の余裕のない「困難な状況」もあるのだという社会的視点を持つ必要がある。オタク文化の現代的意義も認識する必要があるだろう。そのうえで、状況のせいにはせず自己決定する若者を育てることによって、彼らの個人としての充実と、自己決定ができる余裕のある社会の支え手としての充実を目指すことこそ、教育の不変の役割といえよう。
22	書評轡田竜蔵編 『地方暮らしの 幸福と若者』 2017/2/22	単著	平成 29 年 4 月 10 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1428 号、pp. 34-34	評者は考える。社会学のこのような立体的把握は、ややもすると政策の実現のために一面的になりがちな教育関係者にとって示唆に富むものである。しかし、現状変革をあまり考えない社会学に対して、教育は新しい価値の創造を目的とする活動である。ここで言う「地方中枢拠点都市圏」と「条件不利地域圏」の両方で、社会学のリアルな認識に習いながらも、「幸福につながる存在論的価値」を若者とともに新たに創り出す必要があるといえよう。

23	書評前田拓也, 秋谷直矩, 朴沙羅, 木下衆編『最強の社会調査入門』2016/7/27	単著	平成 29 年 3 月 13 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1424 号、pp. 34-34	評者は考える。教師にとっては、教育実践をルポではなく、論文として仕上げようとするのが困難なハードルが立ち上がる。普遍性、客観性、根拠などが問われるからだ。だが、他方で、研究者に対しても、細分化された領域における目的や既存の方法に対する批判が高まっている。量的調査などが正しい手続きで行われたとしても、方法の選択自体が妥当だったのか、さらには目的は意義のあるものなのかが問題にされる。既存の研究は全体的観点からの体系化が進んでおらず、変化に対応すべき教育現場の臨床とは遊離していることが多いのだ。その点でこの本の示唆は意義深い。教職大学院においても、そのような成果が求められると考えたい。
24	書評西村大志, 松浦雄介編『映画は社会学する』2016/7/27	単著	平成 29 年 2 月 13 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1420 号、pp. 34-34	近年、社会学的思考や想像力に乏しい実証研究が増えていると同書は批判する。社会学の大きな目標は人間や社会の「リアル」に迫ることであり、バーチャルな世界の拡大ともあいまって、そのリアルは事実と等号では結ばなくなったという。評者も同感である。我々を翻弄する「小説よりも奇なる事実」に対して、ストーリーという質の良い虚構がもつ「人間的眞実」は、感動をもたらし、追求し続けたいという気持ちにさせる。このようにして、細分化された学問領域の隙間を埋めたとき、体系的理解が深まるのだろう。

25	書評川崎賢一, 浅野智彦編著 『〈若者〉の溶解』2016/10/25	単著	平成 29 年 1 月 2 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1416 号、pp. 34-34	現代青年文化は、厳しい現実に対応する最初の本格的な対応様式を築こうとしている。評者は考える。われわれはアイデンティティを自己同一性にとらえ、その確立を若者の自立にとっての不変の価値として教育活動を進めてきた。だが、若者が「重複型アイデンティティ」によって現実適応しようとしているとするならば、自己同一性を押し付けられることは残酷な話だ。価値の伝承と創造を担う教育だからこそ、実態誤認の安易な「若者論」に振り回されることなく、若者の自立支援の方策を見出さなければならない。
26	書評電通若者研究部編『若者離れ—電通が考える未来のためのコミュニケーション術』2016/7/29	単著	平成 28 年 12 月 5 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1412 号、pp. 34-34	評者の所属する青少年研究会では、この傾向を「みんなぼっち」と呼んでいる。本書では、サークルの持つWEの居心地の良さをそのままに保ちつつ、新たな社会とのつながりの形と、人のほどよい距離感をIとして保てる形を両立したサークル用スマホアプリを開発したと言う。教育関係者としては、「みんなぼっち」の若者に対して、社会的視野を拡大させるための「ズレ愛」の方策を考える必要がある。
27	書評秋山千佳著 『ルポ 保健室—子どもの貧困・虐待・性のリアル』2016/8/10	単著	平成 28 年 11 月 7 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1408 号、pp. 34-34	評者は考える。一般の教諭にとっても、保健室でのこのような「自然な対応」は見習うべきところが多々ある。ただ、教室が保健室のようになればよいという話ではあるまい。もちろん、本書に登場する「保健室に入ろうとする生徒を追い返すベテラン教師」などは何とかしたい。しかし、より本質的には、「居場所を求める声なきSOS」に対して、保健室のほか、図書室などの「居場所」と、そこでの専門職の意義と連携の必要性を認識すべきということなのだろう。

28	書評村尾泰弘著 『家裁調査官は 見た一家族のし がらみ』 2016/7/14	単著	平成 28 年 10 月 3 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1404 号、pp. 34-34	村尾氏のこのような深い人間関係を樹立するための展望と方法は、子どもに、若者に、親に、教師に対してどのように指し示すことができるのか。この時代において、「深い人間関係の樹立」自体、とんでもないアナクロにもみえる。しかし、人々が学びあい、支えあう社会の形成を教育の目的とするならば、その樹立こそ教育にとっての不可欠の「現代的課題」と考えるべきなのかもしれない。
29	書評駒崎弘樹著 『社会を変えた い人のためのソ ーシャルビジネ ス入門』 2015/12/16	単著	平成 28 年 8 月 22 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1399 号、pp. 34-34	本書が提唱する「新しい社会貢献」について、評者は次のように考える。このような手の届く範囲で社会貢献したいという若者の志を大切に受け止めた。だが、もう一方で、過去の学生は「儲け主義はイヤ」という理由で教員や公務員を目指していたことを思い起こす（今の学生は安定のためだが）。今後は、職業全般が社会貢献につながるという実態と認識を広げていきたいものだ。
30	書評井上俊・永 井良和編『今ど きコトバ事情－ 現代社会学単語 帳』2016/1/30	単著	平成 28 年 7 月 18 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1395 号、pp. 34-34	グループ内でコミュ力不足と思われないよう努力する若者の姿はたしかに切ない。だが、若者や社会の現場においては、コミュ力を分解すれば「正体のある能力」として理解されるはずである。これを構造化したものがカリキュラムにはかならない。とかく批判される「ゆとり世代」についても、既存の学問体系に頼りすぎて、彼らが必要としているコミュ力に目が向いていなかったという教育側の責任もあるだろう。その上で、ある意味難しい「身内」とのコミュ力とは異なる、ある意味シンプルな「社会」の現場に必要なコミュ力に、生徒の目を向けさせることも考えたい。

31	書評 NPO 法人育 て上げネット 『若年無業者白 書 2014-2015』 2015/12	単著	平成 28 年 6 月 20 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1391 号、pp. 34-34	同ネットへの来所者のなかには、旧帝 大卒で一流企業社員の経歴をもつ若年 無業者も多いと聞く。評者は考える。 過去の学校歴社会の「制約」のままでは、生徒の生涯にわたる個人的、社会的充実を保障する教育は実現できない。今日の個人化、流動化社会における、職場・家庭・地域での自己発揮のための基礎づくりこそ、学校教育の新たな役割というべきであろう。
32	書評藤村正之・ 浅野智彦・羽瀧 一代編『現代若 者の幸福－不安 感社会を生き る』2016 年 3 月	単著	平成 28 年 5 月 16 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1387 号、pp. 34-34	教育界でよく取り沙汰される若者の道 徳意識の低下、友人関係の希薄化など の言説について、この本はデータに基 づいて、正反対の検証結果を提示して おり、傾聴に値する。それでもなお、 評者は、それらの一見「好ましい傾 向」が、じつは「不安感社会」におけ る防衛的態度の表れになっており、生 涯にわたって仕事、私生活、地域・社 会において能動的に活動するためのも のにつながっていないと考える。教育 においては、社会形成者の育成に向け て、タイプ別の深堀りによる正しい生 徒理解を進める必要があるだろう。
33	書評『資質・能 力〔理論編〕』	単著	平成 28 年 4 月 11 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1383 号、pp. 34-34	「社会化と個性的発達と学問の系統性 という三つの教育理念に基づく目標の 融合」など、たとえアクティブラー ニングにおいても、目標、内容、方法、 評価という教育の根本を貫くための理 論が示されている。評者は、個人の充 実とともに、家庭、職業、地域生活を通 して社会形成者としても充実した人生 を送るための必要能力を、達成目標 として理論化しようとする本書の存在 価値は大きいと考える。

34	書評『小学校高学年女子の指導』	単著	平成 28 年 3 月 14 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1379 号、pp. 34-34	赤坂氏は、「全員をひいきする」「グループ全体を視野に入れる」「感情を理解する」よう教師に提案し、いじめ、仲間はずし、グループ対立、集団反抗などへの予防策や対応術を具体的に解説する。評者は次のように考える。今の同一化集団からたとえいつときは孤立したとしても、一人で調べ、考えるような「個」を育てる教育の役割が重要であろう。そのためには、異年齢、異世代、異質の者との交流による「居場所」において、自信と共感能力を育てることによって、社会に開かれた視野の拡大と自立を促すことが必要と考える。
35	書評『甦る教室』	単著	平成 28 年 2 月 8 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1375 号、pp. 34-34	一年間成長を続けていけば、子どもは抽象的な難しいテーマにも答えられるようになり、それが学級でも認められることによって、個が強い集団を作り、「公＝大人」を目指せると言う。個人の成長に焦点を当て、目標を立てさせ、自問自答させ、「強い言葉」を持たせ、「公」の価値を伝えようとする氏の営みは、社会的に大きな価値をもつと言えよう。
36	書評『大学の質保証とは何か』	単著	平成 28 年 1 月 4 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1371 号、pp. 34-34	本書巻末の座談会では、教職員がこのような大学改革に対して、研究時間が奪われるなどの「被害者意識」に染まらずに協力するよう求めている。評者は次のように感じている。研究はできるけど、教育はできない教員など、実際にいるのか。研究も教育もできるか、どちらもできないかのどちらかなのではないか。繁忙感のみに終わる空しい時間を削ぎ落として、研究と教育の両方の質の向上に時間をかけるようにすることが必要だ。

37	書評『どんな高校生が大学、社会で成長するのか!』	単著	平成 27 年 12 月 7 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1367 号、pp. 34-34	溝上氏は、クラスター分析により、勉学、勉学そこそこ、部活動、交友通信、読書マンガ傾向、ゲーム傾向、行事不参加の 7 タイプを導き出す。勉学タイプは、8 割が部活動と両立しており、「よく学び、将来に向けて頑張り、自己成長を実感している」タイプとされる。評者は、高校生から大学生への「移行」において、部活動の積極性を超えたレベルでの自己開発と社会的関与に関する態度変容が求められるのではないと思う。
38	書評『いつまでも会社があると思うなよ!』	単著	平成 27 年 11 月 2 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1363 号、pp. 34-34	川島氏が代表を務める N P O ゴヂカラ・ニッポンにおいては、苦手や弱点ではなく、得意なことに注目する。そして、社会で役に立つ経験を与え「貢献心」を育むことによって、子どもの自主性と社会性を育てようとしている。若者の帰属意識の不足などを批判するだけでは、教育は始まらない。仕事だけでなく、私生活、社会活動のそれぞれの場で、幸せな生涯を送るための基礎・基本を、個人差に応じて身につけさせることこそ、生涯学習時代の学校教育の役割といえよう。
39	書評『一〇三歳になってわかったこと～人生は一人でも面白い』	単著	平成 27 年 10 月 5 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1359 号、pp. 34-34	篠田氏の「一人で自由に生きる」という指針は、社会化重視の教育の価値観と一線を画している。ほかに頼らずに自分の目で見ると、人生を歳で決めたことはない、規則正しい毎日から自分を解放する、などの含蓄に富む言葉があふれている。とりわけ、「自由と個性を尊重するから孤独」かつ「コミュニケーションが大切」、孤立ではなく、人と交わらないのでもなく、混じらない、よりかからないという考え方は、仲間と群れたがる若者にとっても組織の一員としての教員にとっても、個人化社会を充実して生きていくための根源的な示唆を与えてくれよう。

40	書評『対話の害』	単著	平成 27 年 9 月 7 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1355 号、pp. 34-34	評者は、次のように考える。対話はソクラテス以来の教育の原点である。しかし、それは「やらせ」による賑やかな見せ物としてではなく、生徒間協働を進め、ものの見方、考え方の枠組みを拡大させるためにある。そこでは、生徒の学習と省察を尊重することが重要になる。また、ワークショップのなかにも、個人のカード書き作業のなかに沈思黙考の自己内対話機能を見出される。目標と進行、評価基準に基づいて、あの手この手の教育方法を組み合わせることこそ必要なのだろう。
41	書評『授業づくりエンタテインメント！—メディアの手法を活かした 15 の冒険』	単著	平成 27 年 7 月 27 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1351 号、pp. 34-34	精選した内容をびっしりと詰め込んで、①導入、②展開、③まとめで進行させる。これに対して、藤川氏は、①予告、②ライブ、③余韻で授業を構成するよう勧める。そして、教師がすべてを背負い込むのではなく、子どもたちを没入させるエンタテインメントを活かした仕組みをつくり、余裕をもって日々の授業に取り組めるようにしようという。ICTやSNSを活用することによって、教師は楽になり、魂が解放されるというのだ。
42	書評『教育は何をなすべきか—能力・職業・市民』	単著	平成 27 年 6 月 22 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1347 号、pp. 34-34	評者は次のように考える。キャリア教育も「地域における多様な担い手の育成」の一環である。ただし、職業の場だけでなく、家庭、地域での個人の生涯の充実という広い視野で行うことと、受験勉強特有の個人完結型の競争から、社会開放型の「学び合い支え合い」へと転換させることが必要なのであろう。キャリア教育を能動的形成者への「パスポート」にしたい。

43	書評『就活と日本社会—平等幻想を超えて』	単著	平成 27 年 5 月 25 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1343 号、pp. 34-34	常見氏は、スカウト型の求人サイトや、カウンセリングによって採用可能性の高い企業を学生に紹介する人材ビジネス企業に期待を寄せる。その文脈から、「競争が平等ではないことに気づき、弱者は弱者なりの生存戦略を考えよう」と提唱する。そして、「偽装された自由や平等は暴力であり、民衆を希望の奴隷にする」と締めくくる。評者は考える。若者に希望を与えない教育など存立しえない。しかし、不平等の現実のなかで、多くの若者が苦しんでいる。われわれは有名企業への就職願望に代表されるような「希望」の質自体を考え直す必要があるのではないか。
44	書評『育休世代のジレンマ—女性活用はなぜ失敗するのか』	単著	平成 27 年 4 月 20 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1339 号、pp. 34-34	同類婚といって、自分と同等以上の時間のない相手を選ぶが、海外出張に飛び回る夫をずるいと思ってしまう。そもそも就活中も、やりがい重視のため、復帰に不都合な職場を選んでしまっている。中野氏は、「既存の構造を疑い、新しい価値を生み出し、社会を変えていく人材を育てる」よう提唱する。評者は次のように考える。現実社会において重要なのは、自己実現を自己内で完結させずに、他者と自己実現を互いに支え合うということである。
45	書評『女子力男子—女子力を身につけた男子が新しい市場を創り出す』	単著	平成 27 年 3 月 16 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1335 号、pp. 34-34	氏は、「自己満足／他者の目を意識」「ライフスタイル／美」の 2 軸による 4 象限で女子力男子を分類する。とくに「ライフスタイル×自己満足」については、女子会に溶け込んでトークできるなどの男子たちで、企業にとって市場拡大の可能性が大きいという。評者は、彼らの将来の社会生活の充実のため、既存の価値を伝承するとともに、セクシャリティや職業に関する望ましい価値を、今の若者とともに創造する必要があると考える。

46	書評『現代文化を学ぶ人のために全訂新版』	単著	平成 27 年 2 月 9 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1330 号、pp. 34-34	「何が疑似か」という基準が立てにくくなった今日では、見せかけが「どういう条件のもとで」通用するのかが問題である。「好みの物語を編集できる」としても、それをそのまま現実化できるわけではない。「好みの物語を勝手に編集できる」かのように錯覚させる個人化社会において、自己と社会とをマッチングさせ、自己の人生の物語を適切に編み出せるよう支援する教育は、たやすくはないが、意義深いものと評者は考える。
47	書評『社会を結びなおすー教育・仕事・家族の連携へ』	単著	平成 27 年 1 月 5 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1326 号、pp. 34-34	40 人教室に、塾で 3 学年も先のことを学んでいる者と、家族の困窮や不和に苦しんで学習に向かえない者がおり、この教育格差と、家庭からの期待や要求の強まりの中で、教師は疲弊しているという。筆者は、次のとおり新しい社会モデルを提示する。「組織の一員としての身分を与えられる」メンバーシップ型から、「一定の熟練や専門性に基づいて遂行される、ひとまとまりの行為」としてのジョブ型正社員への移行。将来に向かって生きていくための「中間的就労」などを支援する「アクティベーション」。そして、学校の役割を、「保護者や地域に開かれた学校」、「家族へのケアの窓口」と位置づける。

48	書評『つながりを煽られる子どもたち』	単著	平成 26 年 11 月 17 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1320 号、pp. 34-34 「人間関係の常時接続」により、リアルとネットが地続きの世界になった。その自由さが満足感を上昇させるとともに、「安定した基盤がないため不安感も募る」という。日本の女子中高生は、中年サラリーマンよりも日常的に疲れやストレスを感じている。土井氏は、快楽ではなく不安からのスマホ依存、イツメン(いつも一緒にいるメンバー)同士のしごらみによる親友を作れない状況、承認願望(「いいね!」を押してもらうこと)の肥大化などを指摘する。その社会的背景としては、2001 年の小泉内閣の新自由主義を特筆する。不確実性が可能性ではなくリスクとしてとらえられ、新しい出会いよりも目先の確実な人間関係を求めるようになったというのだ。終章では、「学校や地域の『みんなで』という場の倫理が、個の倫理を圧殺しかねない」と指摘する。授業は一人の世界に埋没させて、自己内対話を行わせる時間ではないか。それは、彼らをつながり依存から解放させて自立させる貴重な時間になると考える。「みんな」への負の同調圧力を助長するようなことがあってはならない。
----	--------------------	----	-------------------	---

49	書評『不透明社会の中の若者たち』	単著	平成 26 年 10 月 27 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1317号、pp. 34-34 片桐氏は、1987年から5年おきに大学生調査を行ってきた。本書は、2012年調査結果(関西4大学文系学生652人)の分析をおもな内容としている。性別役割については、家事育児は女性のほうが向いている、「公平に分担する」より「夫もできるだけ協力」、出産したら仕事をやめる、男らしい・女らしいと言われたら嬉しいなど、保守的傾向が見られた。親子関係については、親のようになりたい、子どものままでいたいなど、「反抗期なき若者」という傾向が見られた。社会関心については、戦争への不安が減少し、電車やバスで席を譲る、地域行事に参加しているなどが増えたが、社会運動への参加意欲は減った。政治意識については、福祉社会よりも、競争社会、統制社会を理想の社会とする学生が増えた。生活意識としては、生活満足度が向上し、生活目標としては、この十年で「豊かな生活」が減り、「なごやかな毎日」「自由に楽しく」が増えた。職業面では、出世意欲が減退し、女子は「気楽な地位にいたい」、男子は「遊んで暮らしたい」が増えた。氏はこれを「不透明社会の中のゆとり世代の生き方選択」ととらえる。 「学校で友達といる今が楽しい」だけでなく、予測がつきにくい社会の中にあっても自己の位置決めをして卒業していけるよう支援する必要があると評者は考える。
----	------------------	----	-------------------	---

50	書評『女子高生の裏社会』	単著	平成 26 年 9 月 15 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1312号、pp. 34-34 本書は、親からの虐待や性被害などの心の傷を抱え、「JKお散歩」などの裏社会で働く少女の取材集である。児童相談所や警察については、親に通報されて元の木阿弥になる経験をしているため敬遠がちである。「普通の少女」や「ルールに従順なタイプ」などの「扱いやすいタイプ」も登場する。客の性的欲望への対応が苦痛なのは、すべての少女に共通しているが、「わかってくれる大人がいない」という「関係性の貧困」のなかで、このような仕事にもプライドを持とうとする。店長は、少女の話を聞き、励まし、ほめて叱り、居心地の良さを与える。リーダーになりそうな少女については、過ごしやすいルールや客の喜ぶオプションを考えさせて、やりがいを持たせる。学習支援や貯金代行も行う。「お前の夢はなんだ」などというワークショップも行なう。高校卒業後も、系列の風俗店で働けるよう面倒を見る。これらの「居場所」に対抗して、自己を社会に位置付けることのできる自立のための「居場所」を提供する意義は大きい。それは、卒業後の生涯の充実をも視野に入れたものでなければならない。
----	--------------	----	------------------	--

51	書評『反転授業』	単著	平成 26 年 8 月 18 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1308 号、pp. 34-34	本書では、次の通りそのメリットを挙げている。生徒のなじんでの言語（メディア）で語りかけられる。（生徒会等）多忙な生徒の時間の自己管理を助ける。自己の理解度や学力に応じて進行管理できる。つまづいている生徒を助ける。生徒と教師及び生徒間の関与を増やせる。教師の生徒理解を深める。学習の個別化をもたらす。教室の透明性を高め、保護者自身の学習や学校への態度が変わる。評者は、次のことを再認識すべきと考える。生徒「みんな」が同様な学習成果をあげるということはある。学習は本質的に「個人的事象」であるのだから。能力別指導が、ICT 活用により個人別指導にまで下りてきて、その上で生徒間協働が図られる条件が整いつつあると感じる。
52	書評『活躍する組織人の探究』	単著	平成 26 年 7 月 21 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1305 号、pp. 34-34	溝上氏は、職業生活や社会生活でも必要な「汎用的技能」を学士力の一環として定めた「学士課程答申」（2008 年中教審答申）や米国の国家レポート『学習への関与』（1984 年）を引き、「学生の学びと成長の実態や構造」、さらにはトランジションとの関係を明らかにする必要を説く。単に就職できたかどうかではなく、就職後の適応状況を見なければならないというのである。調査結果からは、とくに大学 1・2 年生時におけるキャリア意識及び自主学習や主体的な学修態度が組織への適応に結びつくことが明らかになった。クラブ・サークル活動やアルバイトによる「豊かな人間関係」については、「良好な友達づきあい」以上の質が求められ、異質な他者からの影響が大きいことが示唆された。なお、「勉強第一」とした者は良い結果にならなかった。

53	書評『世界一やさしい精神科の本』	単著	平成 26 年 6 月 16 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1301 号、pp. 34-34	斎藤氏は、「ナンバーワンよりオンリーワン」や「みんな違ってみんないい」という言葉に偽善性を感じ、「多様性」とは、人の心の限界や不自由さという壁があってこそ生まれるものと主張する。そして、望まれる多様性は反対に、スクールカースト(生徒間身分制)の格差決定要因が「コミュニケーション・スキル」に一本化されていると指摘する。笑いをとるなどの対人操作能力が高いヤンキーが最上層に位置づき、ほかのオタクなどの能力は評価されないというのだ。こういう生徒間の熾烈な生存競争の中で、キャラを演じながらも、カーストの価値観に染まりすぎずに自分を守ることが大切だと助言する。ヤンキー的な生徒の能動性だけを評価するのではなく、受動的な生徒に対しても、多様な評価基準をもって接することが望まれよう。
54	書評『オタク的想像力のリミット』	単著	平成 26 年 5 月 19 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1297 号、pp. 34-34	クールジャパンとしてオタクが脚光を浴びるなか、著者は、海外の「ゲイシャ・フジヤマ・シンカンセン」と同列のステレオタイプの眼差しを超えた理解を図ろうとする。そのため、コスプレ、鉄道オタク、萌え、格闘ゲーム、腐女子などについて、社会学の手法と知見で解説する。いずれも、オタク文化に、近代を超えるポストモダンの可能性を見いだそうとしている。われわれには、今の時代を理解しつつも、どう「大きな物語」としての歴史学等を教えるかが問われているといえよう。

55	書評『ヤンキー化する日本』	単著	平成 26 年 4 月 21 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1294 号、pp. 34-34	ヤンキーは、今や、学校を荒らす不良ではない。青年期精神病理学専門の斎藤氏は、今のヤンキーについて、「高尚な芸術」に対するバッドセンス、「気合い」や「絆」といった理念のもと、家族や仲間を大切にするという倫理観が融合した普遍的な文化であると述べる。コミュニケーションも、お笑い芸人のように達者で、なぜか自信をもって生きている。氏は、同時に、公共概念とセットで「個人主義」を再インストールする必要を指摘する。教育においては、公共を担う者の育成のために、これらの「科学的な見方・考え方」や自他との対話の方法論を彼らに教える役割がある。そのことによって、彼らは、より根拠ある自信を持つことができるといえよう。
56	書評『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2012—失われた 20 年が生んだ“幸せ”な十代』	単著	平成 26 年 3 月 17 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1290 号、pp. 34-34	この調査は、「荒れる学校」が社会問題になった 82 年から、87 年、92 年、02 年と行われてきた。「とても幸せだ」（中学生 55%、高校生 42%）とする生徒が、この 10 年で過去最高の増加率を示した。古市氏は、「スクールカースト」の下位にあっても「下は下で友だちもいるし、そこそこ満足している」と社会学の立場から分析する。しかし、教育学の立場からは、このような「幸せ」に対峙して、「支持的風土の幸せ」を示さなければならない。また、「いい子であるだけでは幸せにはなれない」社会に出ていき、幸せな生涯を過ごすためには、社会のなかで自己発揮するための自我の確立と社会での位置決めを支援する必要がある。80 年代に「荒れる学校」で育った教師は、小さくまとまらずに育てることを考えなければならない。

57	書評『「若者」 とは誰か』	単著	平成 26 年 2 月 10 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1285 号、pp. 34-34	教育は若者の「自分探しの旅」を支援 (1996 年中教審) し、彼らのアイ デンティティ(自己同一性)の確立を めざす。しかし、浅野氏は、自らの青 少年研究会の調査データ等に基づき、 状況に応じて変化する「多元的自己」 の拡大の事実を示す。その上で、これ を従来の知見のように問題視するの ではなく、多元的自己であっても、より 生きやすい生き方や社会のために生か すことこそ重要という。「ゆとり教 育」でいわれる「個性」については、 学力低下批判の嵐に出会い、成績のよ い子は「能力を徹底的に磨くこと」、 よくない子は「成績競争から降りること」 の二重の意味を持つようになったと 浅野氏は指摘する。その上で、「自己 の多元化は、一つの個性への過度の 依存によるリスクを低減させる」と、 両方の若者に手を差し伸べようとする。 教育においては、生徒の自己内対 話を深め、「自分とは何か」の追究を 支援すべきと考える。
58	書評『能力開発 の実践ガイド』	単著	平成 25 年 12 月 23 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1280 号、pp. 34-34	本書は、企業内教育の立場から、教育 を、「人々の暮らしを支え、発展させ るのに欠かせない活動」であり、「温 かな人間観を土台にして成り立つ」能 力開発の活動としてとらえる。学校教 育の立場からは、とくに「暗黙知の整 理」と「クドバス(職業能力の構造に 基づくカリキュラム開発手法)による 能力構造化」の 2 点が注目される。暗 黙知については、「環境＝場の概念」 「最終目標としての成果＝到達目標概 念」「行為(運動)＝空間上の概念」 「構成(作業計画)＝手段と時間の概 念」のもとに、技能分析表を作成する 具体的方法が示される。クドバスにつ いては、職業人としての到達像に基づ く能力を「上から落ちてくる」のでは なく「下から帰納的に積み上げる」方

					法で構造化し、具体的な教育計画及び達成度評価の基準を作成する方法が示される。「ループリック」など、あらためて生徒の能力達成に各教育現場で責任を果たそうとする動きの中で、それに先行する企業内教育のこのような方法論は示唆に富む。
59	書評『ワークショップデザイン 論一創ることで 学ぶ』	単著	平成 25 年 11 月 18 日	日本教育新聞社『週 刊教育資料』1275 号、pp. 34-34	あくまでも教育の視点から、一見「遊び」に見えるような活動も許容されるワークショップについて、活動目標と学習目標を設定し、これを達成するための「P 企画 - D 運営 - C 評価」の各段階の展開について、既存の理論を援用して実践的に解説する。ここで、相対的評価から診断的評価への転換が重視され、新しい評価手法が紹介される。とくに、「予期されていなかった学習」を見落とさず、次の A 改善に反映させる、いわば P D C A サイクルの実現が目指される。このとき、一般的な論では、A から P に循環するのであるが、ワークショップではもっと実践的なモデルが想定されている。適切な評価による修正が、分析、設計、開発、実施のすべてのプロセスに対して迅速に、直接的に行われるのである。

60	書評『世界はひとつの教室ー学び×テクノロジーが起こすイノベーション』	単著	平成 25 年 10 月 28 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1272 号、pp. 34-34	カーン氏は、「ほどほどの知識がある、聞き分けがよくて標準的な市民、労働者をつくりだす」プロイセン型モデルの学校に対して、「家では講義、学校では宿題」という「反転」モデルを提示する。個人のペースに合わせて、100%理解してから次の単元に進む。落ちこぼれはない。MIT に入学したカーン氏は、まわりのみんなの頭の良さにおじけづく。しかし、「途方もない時間の無駄」である大教室の講義を受動的に学ぶ学生を見て、そういう授業をサボり、本当に役立つ授業を受けるなどの「能動的学習」をすることによって、結局、彼らの2倍近い講座を取得することができたという。過去の遠隔教育は、カーン氏が批判するような受動的な一方向授業の象徴であった。しかし、ネットのもつ自己選択性、進度自由性、双方向性は、これを逆転させようとしている。
61	書評『現代エスノグラフィーー新しいフィールドワークの理論と実践』	単著	平成 25 年 9 月 23 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1268 号、pp. 34-34	エスノグラフィーは、一般に民族誌と訳される。本書では、調査者が組織、コミュニティなどの「フィールド」に入り込み、人々の生活や活動に参加して観察し、記述する方法としてとらえる。また、従来の「科学的」な参与観察だけでなく、能動的に協働して、解釈を実践し、多角的な語りを得るインタビュー、自分の所属集団の内側からの観察、自分の問題を自覚した当事者とピアグループによる問題への対処、対話と相互行為の積み重ねによるライフストーリー構築など、新しいアプローチについても論考する。「生きる力の育成」などの教育の目的を考えると、その多様性、動態性から、学習と指導の両側面において、エスノグラフィーの手法は有効であると考えられる。

62	書評『ガリ勉じやなかった人はなぜ高学歴・高収入で異性にもてるのか』	単著	平成 25 年 9 月 2 日	筆者の明石氏は橋下大阪市長の言葉、「僕は学校で教わった勉強なんて一つもない」を引き、国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（二〇一〇年）の五千人の成人を対象としたバックデータを使って、体験活動の意義と必要性、そこで身に付く力、必要な体験活動の内容などについて論ずる。学校教育では、いったい何ができるのか。平成二〇年中央教育審議会答申のいう体験活動の進め方において、とくに自己との対話や思考の外在化（文章化）などの意図的・計画的促進については、むしろ、学校教育の出番ではないかと評者は考える。しかし、明石氏は終章で「成功の秘訣はナナメの関係」とわれわれに追い撃ちをかける。文科省によれば、これにより、学校が地域社会と協同し、学校内外で子どもが多くの人々と接する機会を増やすことを目指している。親や教師、子ども同士は含まれない。教師が子どもとナナメの関係であろうとしたら、それは職務逸脱に近い行為だ。地域人材の活用などの方策が求められるのは当然であるが、それ以上に、「純粋な学校内教育」において、教師が「タテの関係」のなかに「ナナメの関係」による教育力を取り入れられないものか。
----	-----------------------------------	----	-----------------	---

63	書評『日本文化の論点』	単著	平成 25 年 7 月 15 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1260号、pp. 34-34 国家的にも「クールジャパン」として、A C G（アニメ、コミック、ゲーム）の輸出が重視される今日、生徒にとっての「夜の世界」の存在をわれわれも認識する必要があることは確かだろう。後半では、「西洋近代のものとは異なった原理で駆動する新しい世界」の象徴として、A K B 48 を取り上げる。劇場公演、握手会、選抜総選挙、じゃんけん大会といったシステムの意味を吟味し、資本主義によって人間の想像力が画一化するどころか、欲望が多様化し、変化したと評価する。しかし、生徒の想像力、創造力は、本当に育ってきたのか。教育は、従来の文化を伝承するだけでなく、新たな文化を創出する営みでもある。サブカルチャーは、「サブ」という名のとおり、現在の支配的文化に対するたんなる「下位の文化」にとどまる恐れもある。望ましい文化創出のためには、連帯や共同などの教育的価値を伝えるとともに、社会の現状に問題意識を持ち、これに対抗する文化（カウンターカルチャー）の担い手を育成する必要があるのではないか。
----	-------------	----	------------------	--

64	書評『「東京」に出る若者たちー仕事・社会関係・地域間格差』	単著	平成 25 年 7 月 1 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1258 号、pp. 34-34	東北地方の若者の東京圏への移動に関する調査結果などをもとに、収入面では、「恵まれた環境」に生まれた者が「恵まれた立場」を手に入れることができるとする。新卒採用時に県の出身者枠を設けている企業の寮に入れば、同じ高校出身の先輩が何人もいる。ローカル・トラック(水路付け)により移動先が集中している東京圏と宮城県以外で就職したとき、孤立した状況に置かれると指摘する。進路指導にあたって、「個性化の時代なのだから、生徒一人一人が各地の就職先、進学先に自己選択で飛び立っていくことが望ましい」とは言えないのかもしれない。東京圏の大学に進学した者については、出身地で形成した人間関係の減少を、趣味ネットワークの拡大により補うという特徴も興味深い。「高い能力を要求する職業も、高度な教育の機会も、大都市に集中」している現状に対して、地域間格差の是正と教育機会均等のあり方を提唱する本書の意義は高い。
65	書評『つまづかない大学選びのルール』	単著	平成 25 年 6 月 3 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1254 号、pp. 34-34	「入学してから就職後 3 年間までストレートに進めるのは全体の約 3 割」という状況のなか、「就職に強い大学→実際に就職できるのは学生の 50%」などと注意を喚起する。「賢い受験生」として、社会に目が開かれた受験にしなければ、問題の本質的解決はできないという認識なのだろう。氏はパンフレットやWEBサイトで、大学のコンセプトだけでなく、これを達成するための方法と効果の証拠が提示されているかと問いかける。多忙な著名人教員では受講回数も制限されてしまうので、それより、一般の教員が教授法等を改善する訓練(FD)に取り組んでいるかと言う。氏は文科省高等教育局専門調査員、中央教育審議会高大接

					続特別部会臨時委員に抜擢されており、文科省が大学の望ましい淘汰に本気になっていることの表れといえる。進路指導も、大学の実態を内部にまで立ち入って把握しないといけない。
66	書評『震災からの教育復興－岩手県宮古市の記録』	単著	平成 25 年 5 月 6 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1251 号、pp. 34-34	本書は、「教育復興」の観点から、① P I S A 等の国際順位の低下に敏感に反応した結果としての「ゆとりと充実」路線から「確かな学力」路線への軌道修正、②教育指導や学校運営の効率性を高めることに視点を置いた学校の適性配置政策の推進の二点について再検討を促す。「学習のケア」だけでなく、「心のケア」「生活のケア」を、そして学校を地域コミュニティの文化拠点として考える観点を効率化の観点と並立的に捉え、前者に、遊びや住民の満足度を組み込んだ発想を見出している。これを読んで、学校教育がそもそも児童・生徒一人一人の幸福追求と生涯学習の基礎づくりのためにあり、また、学校施設が住民の生涯学習の拠点の一つとして存在していることを再確認することができた。
67	書評『僕たちの前途』	単著	平成 25 年 4 月 1 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1247 号、pp. 34-34	社会学では、個人の自由な選択に責任が帰せられる個人化のマイナス面を強調する。しかし、若手社会学者である古市は、「どうせお金を稼ぐなら、好きな人と好きなことをやっていたい」、「社会を変えたいなんてだいそれた気持ちはない」と言う。社会に猛烈に立ち向かわないことによって、彼は「個人化の罠」からくぐり抜けてきたといえる。さて、教育においては、「自由格差社会」のなか、どのように若者の労働観を育てるのか。「猛烈に自己決定で生きよ」というのか、それとも「自分らしさを大切にするためには、くぐり抜けよ」というのか。評者は、理想追求の教育においては、その

					どちらでもなく、青少年の個人化のプラスの側面を伸ばしつつ、私生活を大切にしながら、職場や地域では、他者と切磋琢磨し、支え合う人材を育成することが可能と考える。
68	書評『ギャルと不思議ちゃん論ー女の子たちの三十年戦争』	単著	平成 25 年 3 月 11 日	日本教育新聞社『週刊教育資料』1243 号、pp. 34-34	女子特有の対立構造は、クラスの中にも見られよう。DeSeCo のいう「異質な集団で交流する」というキー・コンピテンシーの育成も簡単にはいかない。だが、終章において、きゃりーぱみゅぱみゅの分析に至るとき、この対立構造の鮮明さに、やや陰りが生ずる。多元的な自己を操って生きる若者たちにとって、多数派の渋谷系に対する少数派としての彼女の原宿系ファッションを、交友に合わせて選択することは「不思議ではない」。現代青年のこのような「多元的自己」は、「存在確認」というより「存在戦略」ととらえられる。だとすれば、これを上手に誘導して、彼らが同化圧力を乗り越え、異質の他者と交流して、より良い「存在確認」ができるよう、戦略を立て直すべきといえよう。
(解題)					
1	青少年問題に関する文献集第 35 巻	共著	平成 17 年 3 月 31 日	国立オリンピック記念青少年総合センター	2003 年度「文化」「社会」計 390 件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
2	青少年問題に関する文献集第 34 巻	共著	平成 16 年 3 月 31 日	国立オリンピック記念青少年総合センター	2002 年度「文化」「社会」計 371 件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
3	青少年問題に関する文献集第 33 巻	共著	平成 15 年 3 月 31 日	国立オリンピック記念青少年総合センター	2001 年度「文化」「社会」計 463 件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
4	青少年問題に関する文献集第 32 巻	共著	平成 14 年 3 月 31 日	文部科学省スポーツ・青少年局	2000 年度「文化」「社会」計 449 件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
5	青少年問題に関する文献集第 31 巻	共著	平成 13 年 3 月 31 日	総務庁青少年対策本部	1999 年度「文化」「社会」計 391 件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)

6	青少年問題に関する文献集第30巻	共著	平成12年3月31日	総務庁青少年対策本部	1998年度「文化」「社会」計337件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
7	青少年問題に関する文献集第29巻	共著	平成11年3月31日	総務庁青少年対策本部	1997年度「文化」「社会」計323件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
8	青少年問題に関する文献集第28巻	共著	平成10年3月31日	総務庁青少年対策本部	1996年度「文化」「社会」計263件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
9	青少年問題に関する文献集第27巻	共著	平成9年3月31日	総務庁青少年対策本部	1995年度「文化」「社会」計232件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
10	青少年問題に関する文献集第26巻	共著	平成8年3月31日	総務庁青少年対策本部	1994年度「文化」「社会」計234件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
11	青少年問題に関する文献集第25巻	共著	平成7年3月31日	総務庁青少年対策本部	1993年度「文化」「社会」計181件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
12	青少年問題に関する文献集第24巻	共著	平成6年3月31日	総務庁青少年対策本部	1992年度「文化」「社会」計178件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
13	青少年問題に関する文献集第23巻	共著	平成5年3月31日	総務庁青少年対策本部	1991年度「文化」「社会」計172件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
14	青少年問題に関する文献集第22巻	共著	平成4年3月31日	総務庁青少年対策本部	1990年度「文化」「社会」計158件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
15	青少年問題に関する文献集第21巻	共著	平成3年3月31日	総務庁青少年対策本部	1989年度「文化」「社会」計99件(担当事項における「青少年問題の文献の動向」の解説を含む)
(答申文起草)					
1	豊島区生涯学習センター機能の実現に向けての意見書「つど、つながる、つなげる、つくりだす」	共著	平成28年12月26日	担当(豊島区生涯学習推進協議会会長)	人材育成の本質は、「人づくり」ではなく「われづくり」にあるといえる。区民一人一人の自己の充実のための学びは、人によって支えられ、地域での区民同士の学びあいと支えあいは、生涯学習センターをはじめとする社会的支援機能によって支えられる。生涯学習センターとは、区の全域に広がる多様な学習や地域づ

					くりのための各センターの拠点となる専門的センターであり、その「センター・オブ・センター」機能を、区民との協働によって発揮することによって、「つどう・つながる・つなげる・つくりだす」という理想像が実現できるものとする。
2	第3次柏市生涯学習推進計画	共著	平成28年4月30日	担当（柏市生涯学習推進協議会会長）	「地域づくり」、「子育て」、「情報提供」という3本の柱を重点施策として位置づけるとともに、「学びあい」の中で、交流を深め、つながり広がり自己を高め、さらには住み良い地域づくりにつながり、全市で「支えあい」が進むよう意図した。 「子育て支援」については、子育ての当事者である保護者同士が支えあい、学びあい、高めあえる関係をつくるとともに、子ども同士も育ちあえるよう、親子が出会い、交流できる場を充実させるよう提言した。
3	台東区生涯学習推進プラン「学びあい支えあうまち、つながりと交流の生涯学習へ」	共著	平成24年3月31日	担当（台東区生涯学習推進協議会副委員長、起草担当）	生涯学習推進プランの施策展開として、1生涯学習の基礎を養う、2あらゆる世代の多様な学習を振興する、3伝統・文化を継承・発展させる、4健康的な生活の実現と生涯スポーツを实践する、5生涯学習推進システムを確立する、6地域力を高めるの4つを提案し、「学びあい支えあうまち、つながりと交流の生涯学習へ」の実現を訴えた。
4	佐野市放課後子どもプラン運営委員会「放課後子どもプランの推進方策について―青少年の居場所づくりと子	共著	平成19年7月31日	担当（佐野市放課後子どもプラン運営委員会起草委員、佐野市生涯学習推進アドバイザー）	策定過程における市民参画の実質化を図った。各チームは、「機能チャート」「機能関係図」「資源チャート」をもとに、「事業メニュー」を作成した。そのため、事業メニューにおいては、それぞれの事業について、実現すべき機能と達成すべき目標を明確化することができた。居場

	育てのまちづくり」提言				所機能全体が構造的に把握されるワークによって、共有された目標を前提としたメニューづくりが可能になった。
5	佐野市「楽習と参画のまちさの」都市宣言	共著	平成 19 年 12 月 25 日	担当(佐野市生涯学習都市宣言起草委員長、佐野市生涯学習推進アドバイザー)	市民委員のワークショップスタイル上の観点に基づき、「ふるさと」「環境・安全」「子育て」の 3 領域について、楽習と参画による生涯学習のまちづくり像を文章化した。冒頭の「私たち佐野市民は、ひとりひとりが楽習をとおして個人として深まり、」は、個人主導の「楽しい」学習による個の深まりを表わした。続く「その個性を生かし、協働して佐野のまちづくりに参画します。」は、学習によって深まった個によるまちづくり参画の意義を訴えた。これを「個人主導」としての生涯学習活動と、「社会参画」としてのまちづくり活動との連結ととらえた。
6	佐野市生涯学習推進協議会答申「私らしさこのまちに咲かせます」	共著	平成 19 年 3 月 31 日	担当(佐野市生涯学習推進協議会起草委員長、佐野市生涯学習推進アドバイザー)	答申は、「生涯学習活動は、個人の必要のために行われ、その結果、個人が充実する」と生涯学習の個人主導の側面を強調した上で、「そのことによって、私らしさも、より確かなものに」なり、これをもとに「わがまち、わが国、わが地球」のために求められる社会参画を推進するよう提唱した。このように「個人が必要とするもの」と「社会が必要とするもの」を結び付ける重要な要素として「郷土愛」や「社会正義」を掲げた点が、本答申の特徴といえる。
7	葛飾区生涯学習推進計画	共著	平成 6 年 7 月 31 日	担当（葛飾区生涯学習推進計画策定協議会「大人の学びあい部会」座長）	生涯学習は、一人ひとりの「どこまでも知りたい」という欲求を満たし、生涯にわたる発達・成長の機会を提供するとともに、あるがままの自分でいられる時空間を通して、癒

					し・安らぎをも提供する。そのためには、区民や行政職員の個性がいきいきと発揮される人材活用や、情報の共有と区民参加の発信のための条件整備が求められるとした。
8	練馬区生涯学習推進懇談会答申 「練馬区における生涯学習のあり方とその推進についての提言ー土とみどりひとと自分に出会える練馬をめざして」	共著	平成6年3月31日	担当（練馬区生涯学習推進委員会起草委員）	4つの基本戦略として「支援の体制づくり」、「区民参加と交流の場づくり」、「生涯学習のネットワークづくり」、「学習資源の活用システムづくり」を、4つの支援方策として、「参画の力を育み尊重します」、「人と人をつなぐ活動を応援します」、「人と地域をつなぐ活動を応援します」、「生涯学習機関と連携します」を掲げて、生涯学習推進方策を提言した。
9	佐野市生涯学習推進基本構想	共著	平成5年4月30日	担当（佐野市生涯学習推進協議会起草委員長）、佐野市教育委員会	市民一人一人の個人としての充実とともに、その個人が新佐野市のまちづくりのなかで市民としての役割を発揮することによって、ますます個人としても新佐野市としても充実するという「自己形成と社会形成の一体化」を実現する生涯学習推進の展望を示そうとした。
10	提言「青少年団体活動は青少年の自己成長にどう関わるか」	共著	平成5年3月31日	担当（中央青少年団体連絡協議会「特別研究委員会」起草委員長）、中央青少年団体連絡協議会	「個の深み」を、個人が集団に埋没することなく一人ひとりがそれぞれの「方向性」をもつ「個人」として生きること、そして、固有の方向に向かって深く踏み入ること、あるいは踏み入ろうとすることとして定義した。その上で、青少年団体が社会の新しい変化に対応するためには、「個の深み」の尊重を軸として、メンバーが自律的に成長できるような団体運営が必要とした。
合計		220	種別	<Ⅰ著書> 31、<Ⅱ学術論文> 78、 <Ⅲその他>学会発表 18、書評 68、解題 15、答申文起草 10	